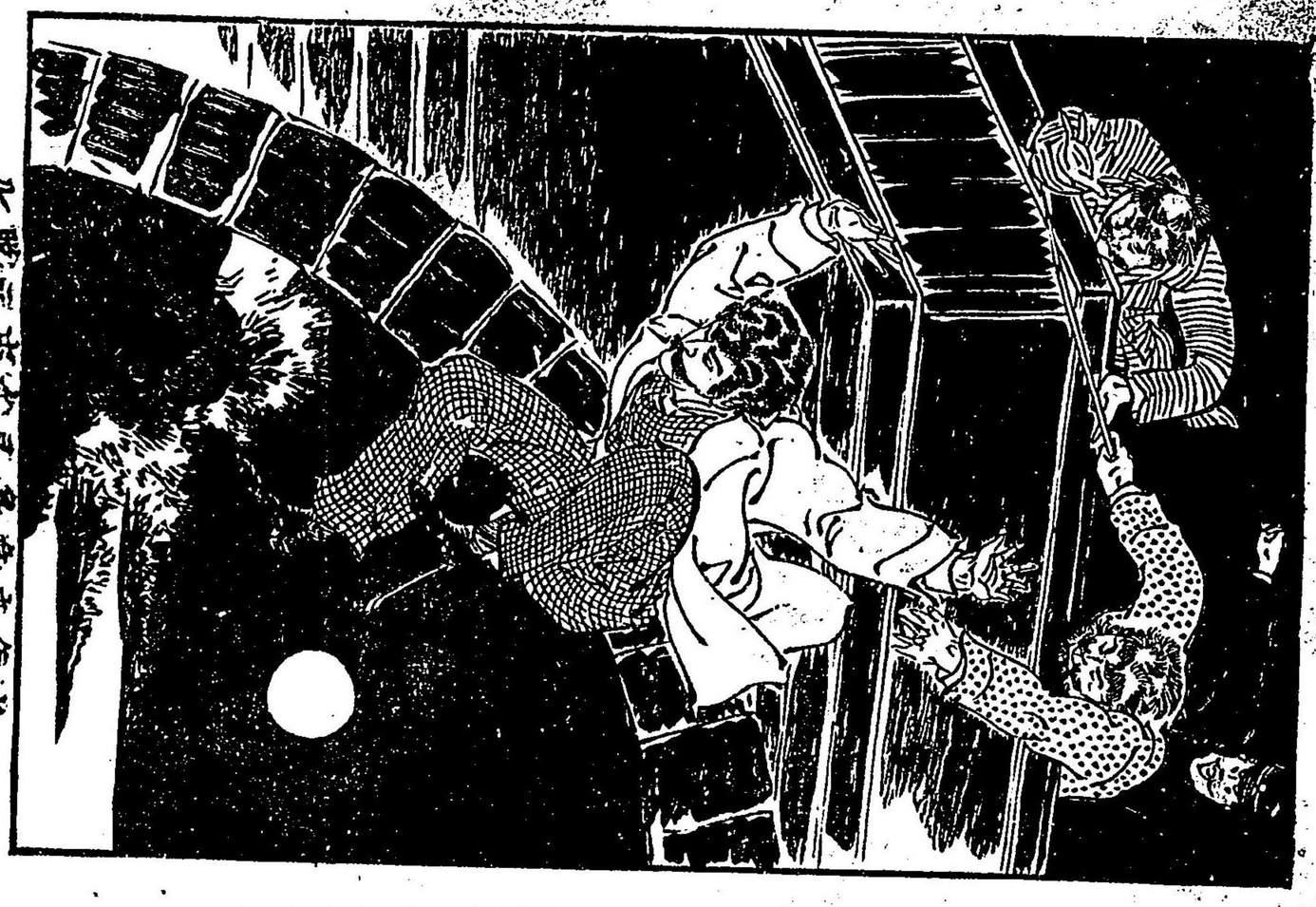
特 8
239

短銃

凡そ人は得難きものを得んことを欲するものなり人として必ず得んことを求むるものは何者ぞ自由耶ち是なり自由とは如何なるものを指して之を云ふ如意耶ち是なり人間世界總て意の如くなるを得るもの甚だ稀れなり故に支那の學者も人間意のなるの日なくして如くならざるもの十に七八と云へり是を以て自由と其得難きが爲めに人の益す欲望する所となり彼の佛民の如き熱血を以て之に換ゆるに至る是れ他なし其得難きが爲なり我友春泉井上君近頃白露革命の小說

を譯し題して佳人之血涙と云ふ此の小説も白露國民が彼の得難きものを得んことを企てたる事蹟に係り其結構頗る巧妙にして得易きものにあらざれば許多の看客得難きものを欲するの熱心を以て必ず之を購讀するに至らん記して序に換ゆ

東台　荷香逸人



彩色鬼魅怪物圖之一

彩色鬼魅怪物圖之二

特8
239

短銃

第一回　壯士義俠救佳人

頃は一千八百四十四年十二月斜陽は既に古兒爾列羅斯山の彼方に沈み日も全たく暮れ果て影疎々なる星の光も地上を照して冴へわたり肌膚を擘く朔風に啼きつれ歸る雁が音も身にしみ〳〵と哀れなり這所ハ南阿墨利加洲白露國の首府にて理麻と稱ふる一都會大厦高樓甍を列ね四通八達の街衢を晩曛の景色に誘はれて或ひは三人或ひハ四人戸外に出て彼地這首と漫歩さをなす人も南に北に西

東織るが如きの雜沓繁劇纏々として引もきらず行く人あれは歸る人あり横に歩み縱に往き千差萬別の其中にも文綵美帽の紳士あり弊衣草帽の野人あり或ひは面被を被むり齋紈長く地に引きて泥土に塗るゝを意ともせず進歩を運はす佳人あり後より續て來る秋水の眉玲瓏の眼丰神綽約躰度輕盈緩歩を移すの美少年あり貴賤貧富老若男女眉を併べ臂を接へ府中に有名き遊園地「プラザ、マヨル」の方を投して思ひ〳〵に歩みゆく此時當國の有樣は开も如何なる氣運にやあらんと細に之を視察するに社會の上流に位して貴族高家と呼るゝ者は往昔當國を攻め取りたる西班牙人ピザロー等の血統に出でゝ末葉にして其行なふ所か

祖先か暴力を以て人の國を畧取したる不正の所業に倣ひ威權を特みて下民を虐たけ傍若無人に擧動けれは其壓制に堪へずして在來府中に住居たる印度人を次第次第に遠き山林に逃げ隱れ密ふ英氣を養なふて國土回復の謀畧を運らし何時かハ積怨を酬ひんと折々刄を研き居たり爾れは印度人にて少しく活潑の氣象を有し有爲の心ある者ハ絶て府内に足を駐めず然るに又た此に西班牙人と土人と婚姻を結び其の間に生まれたる一種の人種あり貴族の輩は此等を人の如くに視なさず彼等ハ皆な間の子なりとて禽獸の如くに輕蔑なし已れ一人か人間なりと言はゝはうりの有樣にて陸梁跋扈一方あらず斯りければ彼們も又た

其の憤懣に堪へずして切齒扼腕せざるものなく共に俱に貴族を怨みて彼の純粹の印度人と心を協せ計畧を通じ來すべき隙あらば直に國土回復の大事業を企てゝ驕り慢ぶる貴族等を己の奴隷にふしくれんと時機の至るを待ち構へ人心恟々として穩やうふらず例へて云へは爆烈藥の濕りたるを埋み火の灰の中に埋づめたる如く晩かれ早かれ破烈せんとするの有樣なり閒話休題茲に「プラザ、マヨル」遊園中の尤とも壯觀なりと言れたる噴水池邊に集まりたる一團結の壯狡等は何れも貴族に怨を抱く不平黨の面々にて皆ゐ貴族等に重き稅を課せられ夫れが爲め悉とく家產を傾むけ上はます〳〵富み榮へ下はいよ〳〵困苦に迫り

貧富の懸隔甚はだしく此等不平黨の人々は皆ゐ禍災を被むりたる俸輩にて身には木綿の衣服を着し時候は正に冬なれど冬の仕度の出來さるにや麥藁帽子を戴だきて見るさへいとど氣の毒に見すぼらしき打扮ゐり或ひハ池邊の石に腰を掛け又は地上に跪坐て甲說き終れは乙進み乙退そけば丙進み貴族の傲慢を罵しるものあり門閥の弊害を鳴す者あり囂々として語り會ふ群集の中に蹲踞居たる顏容ゐら衣裳まで賤しからぬ兩個の壯丁あり一人を「ミラフロア」と呼び一人を「アンドル、セルタ」と稱ふ這の「アンドル」と云へるは或る豪商の子息なりしが父某甲と先つ年羅夫樣他(一揆を起して當國を紊亂たる人なり)の亂に遭ふて其身軍役

に從がひて遂いに戰死したりしかは「アンドル」は父の家督を繼ぎ家には巨萬の財貨を積み海には數十艘の大船を所持して運輸の便利人手を借らず出る時は玉の馬車あり居るには金殿玉樓あり富貴觀樂心のまゝ何一つの不足はなけれと其の稟性怜悧活潑にして天賦の自由を尊とぶものから些々たる富貴に安んじて祿々生を終るを欲せず深く貴族の專横を憎みて常に憤懣の情に堪ひず貴族を倒さんためにて父より受たる財産を傾ぶくるも更に意とせず遂に不平黨派に交りて充分己れの思想を吐露し常に過激の說を吐きて同志の人心を鼓舞したり而して此の「ミラフロア」は元來「アンドル」か親友にて今兩人は先より何やらん頻りに

話し居たりしか「ミラフロア」は熟々と「アンドル」の說を聞き了り然なり〳〵と默頭けは「アンドル」も詞を厲まし左は云へ妙計奇策を運らして我々の目的稍や貫徹し第一着手に貴族を撲ぞけ政府の官吏を更迭なすとも平等の制度立ざる以上は決して滿足を爲すべからず御身は如何思ひたまふと問ハれて「ミラフロア」もしは〳〵首肯き御身の所論理義に傍へり予も素より同說なり賛成々々と喝采す「アンドル」尙も言葉を繼ぎ今の有樣にても我儕ハ商家の子として巨萬の富を重ぬるも彼の憎むべく嫌ふべき貴族等の爲に壓制せられて假令車に駕たるとて驢馬より外には何も用ゆるをならず返す〳〵も惜しく又た我か國家に盡したる其功

勞も云ふまでもなけれど遠く外國に貨物を搬ひて國の富
强を致せしハ俺が多數の船舶に因るもの少なくさにあら
ず又た俺が所有の財産は那の貴族等が虛爵に增して遙う
に貴とかるべきに彼們に權力を奪れて斯く輕蔑せらる
ゝとは實に殘猿しくも口惜く此を思ひ彼を想へは吾が膽
も斷るゝはかり首尾よく復讐を遂ざる間は決して斷念い
たしがたしと天を仰ぎて嘆息なし互ひに顏を見合す折し
も誰うハ知らねど聲高く見よ〳〵彼方より來りたるは頓
扶亞南土にハあらざるか揚々として駟馬に鞭うち叱咤道
を開かす容子は憎みても猶ほ餘りあり其肉を啖ひ其血を
啜り其皮を引き剝ぐとも尙ほ厭き足らざる逆賊なり又た

其跡に引續きて同しく此方ふ來掛るは「ドンベガル」にてあら
ざるか虎の威を借る狐にて其有樣の面憎さよ殿よ突よと
疾聲大呼頻に叫び呼りけれは人々之に驚ろかされ彼方を
屹と見てけれは山の端高く差し昇り隈なく照す月影に一
頭の肥馬沙塵を蹴立て風を逐ひ駈來たる車の裡にハ「ドンベ
ガル」が最と儼然として坐を占つ群集の中を人もなげに右
と左に押し分けて横截らんとしてけれは四方より起る鯨
波の聲罵詈雜言至らざるなく耳に響きて囂ひすしけれど
「ドンベガル」侯は意ふ注めず知らざる似して頭を垂れ默然と
して物云はず御者を馬に鞭加へ群がり掛りて石瓦を雨の
如くに投げ付くる不平黨の國を切り拔け早くも此邊を馳

せ去けり扨も此の「ドンベガル」と云る貴族中の一人にして少しは事理を明らめ不平党の憤懣を慰ぐさめんとするの心算ある普通の人なれど其身貴族の位地に在れは勢ほひ不平党を輔くるを得ず恐ゃとして其地位に立ち居たり爾れば他の己を知りて人を知らざる壓制家の傲慢無禮極まりなき一般の貴族に比すれは少しは勝りし人と謂ん歟却て說「アンドル」は「ドンベガル」侯の行き過きたる後影を見送りて憎き奴よと咳やけば一個の壯丁聲を怒らせ御身が彼等を憎み玉ふも最早や僅少の間なるべし吾儕は御身と共々に彼貴族輩が驕り傲ふる今の有樣に引き換て吾儕に哀を乞ふとの可笑くも又た殘猿さを笑ふ時節は近かきにあらん愉快ゃゃと雀躍なせば「アンドル」は聞て片頰に打ち笑み實に然る事も候へん彼れ貴族等は日來より色に耽り酒に溺れ日ゃ安逸を事として更に社會の景況を察せず只だ驕奢をのみ極むるゆゑ近きうちにも財寶竭き出入頓に相償なはず忽ち觀樂極まりて哀悲來るハ必定にて彼等が自滅ハ近きに在らんと云ば件の壯丁は再たび聲を放ちて云ひけるやう實にや御身は豫てより猶太人の「サミュエル」と取引したまふとなれは貴族の奴們が驕りの爲め費やすところの財多く年ゃの出入相償はずして借財日に月に嵩みいと困難ある財政の内幕を委しく了知し給まふらんと問れて「アンドル」は〳〵首肯き如何にも御身の云るゝ如く俺は

彼の「サミュエル」と親しく取引なすをもて其元帳を撿たるに出入の高夥たゞしく相違して彼ハ常に貴族等に媚び金銀財寶を貸し與へ其抵當として彼等が誇る虚爵の權威を自から弄し金力を以て虎に齊しき貴族の威を借り跋扈なすこと辭に盡くしがたし爾れは貴族が使用する金銀財寶の出所を糺せは皆な「サミュエル」の庫内より出たる者なれは高慢なる西班人もいつしか彼狐奴に金力權威もろともに皆な奉ひ所られて自滅を招き道路に食を求むるふ至らんと鏡にかけて見るが如しと語るを側にて聞き居たる「ミラフロア」は形儀を正し「アンドル」に向ひて云やう御身の話にて押とさは彼の貴族輩も日に月にいよ〳〵衰運に

赴かんと必然あれど御身は夫れに反對して彌々資産を增もたまもんが其時こうは豫てより俺にも人にも語りたまひし彼の「サミュエル」が娘なる「サラー」を娶りたまふるべし「サラー」は素より理麻の地にて生れたる者なれば容貌体度一つとして白露の人に異ならず且つ高等の教育をも十分に受たれは御身の妻に娶りたまふも決して恥かしくえあらざれど奈何せん其名のみは未だ猶太の臭氣を脱せず實に珠に瑕とや云ん此等は如何にしたまふぞと詰れは「アンドル」首を打ち掉り恁る些細の事に何ど心を費やす事やはある俺え疾より彼の「サラー」を娶らんものと心の裡ふ斷然思ひ決めたれは何條今更止まるべき今より一ト月たゝは

内必らず婚儀を整のへ其折改めて御身等に吹聽致すべしと意氣揚々と答へたり登下又た一人の壯丁進み出で「アンドル」に打ち對ひ御身の富貴を以てすれは婚儀を貴族に結はんとても最と容易ふるべきに何を苦しんでう殊更に吾々さへ快よしとせざる猶太人の娘を娶りたまふ最と不審く候らふと嬲る詞を打ち聞きて「アンドル」は少しく怒の色を現はし「道は異な事を問るゝものかな彼の貴族等も驕奢に長じ下を虐たげ己を利し其甚はだしきに至りては暴官となり汚吏に任じ自由權利を束縛して平等の理を辨知せず人にして人に非らざる彼等の女を娶りてこそ世の批評をも受くべきなれ猶太人とて吾々と同等同種の人類なり之

を貴族に比ぶれは黒白邪正の差違ありと言辭正しく云ひ放てど曩に樣々傳手を求めて貴族の列に入らんとせしも猶太人の女と結婚の約束せしを以て太く彼等に卑しめられ一言の下に擯斥せられて羞を受たる絆しも有繋に耻て告げもせず嘲み笑ひし其人を斯くぞ排擊したりけれは其權幕の怖ろしさに誰とて口を開く者おく暫し言葉はなかりける折うら群集の人を押し分けて一人の大漢顯れ出で「アンドル」の肩先を磕とはうりに擊ければ「アンドル」は打ち驚ろき誰なるらんと振り向き見れは眼圓に色黑く頰骨高く顯はれて鼻は恰うも獅子に似たるが身にハ荒拷の衣を着て耳に珥環を箝めたるを問はでもあるき印度人なり斯

と見るより「アンドル」は怒氣忽ち心頭に發し眼を瞋りて大漢の顏を疾視へ暫らくは物さへ言で在けるが俄然怒聲を發して曰く此の印度人の馬鹿奴めが漫に來りて我を侮どり虎の髯を引うんとするや目に物見せん覺悟せよと拳を握り身を跳ら！打ち蒐らんとしてけるを「ミラフロア」は周章狼狽き這は物にや狂ひたまふ止まりたまへと幾回う止ても止まらず「アンドル」はます〳〵怒りいよ〳〵昂り俺れ彼の奴隷を懲さずんば握りつめたる此鉄拳を和らぐ術もなう〳〵に彌ヶ彼奴ふ侮どられん無益の止立したまふなと聽き入る氣色あらざれば「ミラフロア」は言葉忙しく御身の怒りを爾るとおがら开は餘りに大人氣なし彼は其名を山

暴と呼びて素より一個の痴漢なれは誰とて敵手になるものなし然るを御身只だ一人恥にはあらぬ些少の恥を恥とし怒りて彼の痴漢と力を角べんとしたまふと狂人を逐ふの不狂人暴虎憑河の勇者なりと却つて人に笑はれなん日來の沈着にも似合しからぬ最と輕卒なる擧動あり慎しみたまへと理を責めて支へ止むるを耳にも掛けず腰に帶たる短劍を引き拔うんと身搆へたる折しもあれ婦人の泣聲耳元近く聞ゑけれは喧嘩の相手山暴は何思ひけん羣集の中に紛れ入るよと見る間もあらず何處ともなく影を隱し姿を忽ちまち見ゑずなり「アンドル」は切齒をかし鉄拳を握りて突立上り怒氣滿面に溢れつゝ最と凄まじく見ゑけれ

は「ミラフロア」を之を宥め今此處に集ひ來りて府中の婦女いづれも皆高慢にして談ずるに足らずイザ是より他所に移りて共に不平を語らんと手を携さへて歩み行けば他の壯狡等も後に跟て遊園の彼方に歩を移しぬ此時夜は稍や深けて羣集は益々加えりつ人海高く波を打ち肉城長く連なりて當府の知事の住居せる居館の門外まで滿たれば門を護れる番卒もしばし〳〵失聲大呼して早く解散すべき旨を命じ偏に雜鬧を制止したり又た各種の商人も斯る羣集の人々に賣捌かんと公園内に處狹くまで店を併べ食物を賣る翁あれは玩弄物を鬻く小女あり其他千種萬樣の商品一も具えらざるなく山の如く最と夥たゝしく簇がり

集ひて恰かも博覽會を見るが如く又た大なる雜貨店に入りたる心地せり折柄群集の中を右に除け左に推されやう〳〵と歩み來れる兩人の婦人一個は年の齡十六七夜目にはしうと見判かねど眼清しく鼻筋通り肌膚の色白きとい殘んの雪をも欺むくべく翠の髪香氣なるえ松の色をや移しけん柳の腰の嫋々として着たる衣に堪ねざる如く風を恨める春の花雲を嘲てる秋の月輝やくはかりの妖顏美貌儔稀なる手弱女なり一人は年も五十餘り身裝も左ほど賤しうらぬは少女の媽母と思はれたり二人は今しも群集を突て通り過ぎんとかしつゝも何の急ぎの用事やありけん四方の人に會釋もおく押し退け掻き退け込み入らんと前

なる人を押たりしに群集の人々大に怒り聲荒らげて異口同音に此の無禮なる外國人めが人の愉快を妨たげて我が物顔に人中を通過するとの面憎さよ人の頭を押退けつ足を蹈みて傷つけながら一言の詫もなさで行まくするは白痴にあらずは盲目なるべし世にも愚けの婦人よと府中の人の口善惡なくいと仂なく罵しり騷げは乙女は進退度を失なひ唯だ茫然と佇止み居るを嫣母は和理なく手を捉りて扶け去らんとなしたれど乙女は人に押しすくめられ身動さへなり兼て暫し躊躇ひ居たりしが歩み寄たる一個の牛飼物をも云はず鉄拳を抗げて彼の娘を只だ一擊になさんとする那の時遲く此の時速し今ま牛飼が振りあげた

る鉄拳を後の方よりむづとはうりふ捉へたる年まだ壯き一人の男しばし待ねと引き止たり狂暴無慘の牛飼ハ爭で か之を堪へ得べき己れ何ゆゑ邪魔ひろぐ我うら先に斯して呉ん鉄拳の相伴所望かと怒に任せて無二無三に擊て蒐るを壯丁は彼方此方しはし遣り違へ腕に覺ねのあるものにや頓て我が身を屈ませて擊ち來る鉄拳の下潛り突と牛飼の前に進み手胛緊と引捉へ曳と一聲肩に擔ぎて大地へ動と投げ蹣せは彼の牛飼は咄嗟と計り筋斗りて身を仰天し三間可彼方なる石に弱腰痛く擊ち霎時は起も得ざりけり彼の壯丁は之れを看て早くも娘の傍に馳せ寄り何れの方かは知らざれども危ふき難義に出會たまひ嚇な驚ろ

たまいつらんが幸はひにして在下が一臂の力功を奏し救ひまゐらせたる嬉しさよ斯る處に長居せは又たも什麼なる難義や起らん疾々家路に歸りたまへ余も送りまゐらすべーと最と懇切に介抱す此時までも色を失なひ身を震はして怖れ居たる娘子はやう〳〵心を安んじ救ハれたる其人に禮を述んと向上れは年は二十を三四越にて眼清しく眉秀で威あつてさしも猛からず活潑の氣象は言語に現れ有爲の心ハ舉動に出で容儀儼然印度人種の尤物とも一目して知られたり娘子も此の少年の世に比倫なる才貌を瞠視めて暫し恍惚と詞も出さでありけるが老女ハ夫と心付けん側らより手を捉りて彼の壯丁に禮を述べ別れて

彼方に歸りゆくにぞ娘子はさしも殘念しげに幾回ともなく見返りつ佇立まるを迫立る老女に引かれて歸り去る双方の影ハ群がる人の中に紛れて見ゑずなりぬ此時件の壯丁に投げ付られし牛飼は顏を顰皺て起さあがり撲れし腰の痛楚をは撫で擦りつゝ傍の樹に鼻綱を繫ぎおきたりける牛を引き連れ蹌踉と狐の如くしば〳〵見返り犬に逐れし猫兒の如く背を高めてぞ逃げ出し覺にて居よと捨臺詞跡に殘して走せ去りぬ壯丁も片頰に苦笑みつ思ふにも似ぬ脆き奴うふと咳やさながら是も亦た同じく此場を立ち去りける

第二回　雨壯月下爭雌雄

ろ〳〵理麻の首府と云るを利末苦河の岸に在りて其の河口を距つること凡そ三里貳十丁余北と東は諳揑斯の山脈疊々として折り重なり雲ふ聳ゆて峻峨たり市街ハ重に一方の河岸に建て連ねて對ひの岸にハ只た僅かにサンラザロ一の外構あるのみ此の間に架け設せし長き橋は石造にして美麗を極め恰かも白蛇の横たはるが如く彩霞の中の虹かと疑かふ其の結構を如何にと云ふに五箇の圓門ハ洞穴に似て朝に一片の雲を吐き三角の橋杭は激流を截て夕に千百の珠を飛はす其景狀の絶妙なること能く筆の名狀すべきにあらず殊に又た橋の位地頗ぶる地平より高まりたれば眺望の景にも富て暑さ激しき夏の夕は市中の男女打

ち連れて日中の暑さを忘れんと皆な此の橋に聚ひ來り涼き流れの上を吹く涼しき風に面を洗ひ夜の更るまで遊び興じて歸るを忘るゝ人も多く此の都府中納涼第一の好き場所にして其時節にも最と賑はしき繁となん偖てまた市街の延袤を云へは東西凡そ一里南北凡そ十七町其周圍に建て列ねたる壁の高さは一丈二尺幅は九尺にも餘りつべし築き立たる壁の土質は「アドベス」と唱へ藁片と粘土とを混合して製作したる物なりと云ふ這は當國に少なからぬ地震に堪ひて崩れ落ぬ堅硬の質を備へしとか(吾が國土藏の製も亦た之に同じ)構へには都合七個の大城戸と他に三ケ所の小門ありて東方のしゆ聳へたる霞の如き丹樓飛

閣を「サン、カセリノ」の城塞とす元來この市街は今を距る三百四十余年前(一千五百三十四年)西班牙人「ピザロー」が初めて建たる者の由にて爾來日に月に繁盛を加へ今日の盛大を致せりと云ふ此等は要なきことの如くなれど本書に關係少なからねば序でながらも參考の爲めこゝに茲に記しぬ閑話休題案下某生那の娘子と老女の兩個は危ふき難を救はれて辛くも群集の中を脱れ漸やく橋の袂に來にけり斯も此の娘子を誰かと云ふに是れ別人ならず彼の「アンドル」が豫てより思を懸け我が妻に娶らんと公言せし「サミュエル」が愛娘の「サラー」なり這夜媽母に伴なはれて「ブラザ、マヨル」の遊園に遊歩せしが圖らずも前回に記せる如く

亂暴者に出會ふて既に手込にせられんとしけるを折よく壯丁の救助に依て危ふき場所を遁れつゝ又も障碍のあらぬうち疾々家に歸らんと「サラー」が件の壯丁に心は殘れど迫き立る媽母の詞を否みがたく伴はれつゝ往來の成るたけあらぬ細道づたひ足を迅めて「イマック」の橋をやふやふ渡り果て「サンラザロー」の外構に入らんとなしたる彼方より歩み來りし一人の西僧(耶蘇教の僧侶なり)「サラー」と顔を見合せて箇と珍らしや何處へ行玉ひしぞ遊園散歩の歸途なるか吾僧も近來教用の最と忙しきに取りまされ永らく無沙汰を仕まつりぬと片頬に笑を含みながら目禮をしてゞ行き過ぎける這は「カマコデス」の僧「ヂョーチム」と云

へるものにて日來見識れる人ありけり媽母は猶太の婦人にて其國風として痛く耶蘇教を忌み嫌へは頗膨らして「サラー」に對ひれ嬢さまには彼のやうな乞食僧侶と交際へなさるにや彼等と深く交はりたまへは朱に混ハりて朱くなる世の俚諺に洩れずー終には珠數を携さへて禮拜堂に詣でたまひ得もーれぬ神を拜ーて彼の賣僧等に魅まされたまはんアヅ忌ハーくも腹立ーやと口汚おく罵なむれは「サラー」は聞て顔赫らめ又しても何に言やる卑妾ハ耶蘇の僧侶等と社會の交誼の止みがたく如何ほど親ーく爲せはとて左樣な事は得る爲さじ益なきことを云やんなと言葉靜かにおだむれば媽母ハ急に聞耳立て貴女が今夜の擧動は

ど世に不審るとはあらじ倘ー大殿のお耳に入なば如何はうりか怒りたはまんチトおたしなみ遊はせと云はれて「サラー」を心を得ず开ハまた其許の詞なれど今夕の事ハ强ち卑妾が罪とと云ひがたー那のあらくれたる牛飼が卑妾を捉らへて亂暴せずは何事もあらざりしに時の不祥は是非もなや折わろくて斯の如き亂暴者に出會たり卑妾なりとて爭でうは好んで亂暴にあふべきぞ开をーも卑妾の罪なりと云ふは餘りに情なしと最と不樂氣に怨ずれは媽母も猶も合點せず頭を左右に打ち掉て卑妾が云ふは牛飼の亂暴したる事にハ候らはず外に仔細の侍れはこう斯樣にお諫め申すおれ根るもあらぬ空事を何條迂濶くと申

すべきよくく お考がへあらはせと心あり氣に云ひけれは「サラー」ハ尚更心得がたく小首を傾むけやゝ暫し默思居たるが是そとて別に思ひ合すべき事實なきより媽母に對ひ他に仔細のあることゝ如何なる事う卑妾にはとんと合點は行きはべらねど今夜の事を始めから能くく思ひめぐらせは彼の時壯き印度人が卑妾の危急を救ひたる事より外に何もなし爾すれば其許は彼の事にても可笑く思ひ居るならめと問返せは媽母ハ默頭き如何にも其事にて候らふふり最前貴女の危急をは救ひくれたる事にも實に嬉しくハ侍れども那時よりして彼の壯丁の貴女の跡を尾て來つ心あり氣に幾回う貴女の前を遮ぎるゝ一切以て

心得がたく實に不審に堪ゑざるなりと聞て「サラー」ゝ胸に釘うたれてパッと赭らむ顏時ならふくに紅葉ちる色は幸ハひ被物の內陰に隱れて見へざるこう「サラー」がためには僥倖なり媽母は始終の樣子をば迅くも夫と悟りしが夫とも未だ心注かずや猶も詞を亞ざて云ふやう彼の壯丁の事はしも如何程彼奴が工夫して貴女の側へ寄らまくすると卑妾が嚴しく保護しはべれは決して意とするにハ足らされど只管心に懸りゝゝべるは貴女が胸の中にはべり纏に遊園內の禮拜堂にて信者の拜禮を妨たげたまひ逆り過ぎんとしたりしは未だしもの事ながら何と思ひたまふていつう彼等の輩に傲ひて共に殿前に跪まづき拜禮を遂

んとしたまひつる心の中ハ色ふ顯ハれ最と明白に見にとべりさ蠱にも既に申せし如く心の耶蘇教徒は神を賣り經を鬻ぎて己を利し人を傷つけんとする白徒なれは彼等の詐術ハ巧妙なり其の巧妙なる詐術に魅まされ既に業に精神の半を彼等に奪はれたまひし御心の中こう薄情なれ爾るをもて卑妾は其時早く他所へ誘なはんと貴女の手を捉り此方へ來ませと切に諫めまゐらせしも貴女は猶ゃ我を張りて更に聞き入れたまず忽まち不測の禍害出來て惡暴者の手込に出會ひ既に危ふき場に臨めり此事若しも大殿の聞せたまそば如何はかりう怒りたまひて卑妾をば傳守方の惡うりしと痛く叱らせたまふらめ万一斯る事あらは

爾來貴女が外に出で遊歩したまふ時と雖ども卑妾のみの御伴にてハ必らず許したまふまじ些少は之れを思ひたまひて御心たしうに持ちたまへ卑妾は耶蘇の拜殿前を通るとさへ快よからず現に耶蘇教ハ邪教にして決して歸依すべきものにあらずと老たる人の癖として耳かしましく播き口說けど「サヲー」ハ先の印度人の儔稀なる少年姿其面影の眼前に髣髴き恍惚として醉るが如く又た醒が如くにて煩腦の狗迫ども去らず戀情轉た迫り來て只だ其事をのみ思ひつめ思ひ屈して忘られず心爰に在らざれは嫣母が云たる言の葉も更に耳には入らざりけり落花既に情あらば流水何ぞ意なからん緣あれは千里之れが爲に遭ひ緣なけ

れは肝腑も哭越の如く戀は心情と云ひながら緣なきとき
と爭でうは合歡の時に逢るべき戀せずほと吟たり」古の
人の歌の意も其身ならでは解し難れからん
却つて說く「サミニエル」の愛娘「サラー」の危厄を助けたる彼
の印度の壯丁ハ盡る時街衢を徘徊して一度「サラー」を見た
るときより其妖艷の婢姿なるに心猿忽ち逢ひ園で止めん
とすれど止まらず狀る美人は又と世にあるべきやハと思
ひつめ思ひ凝てはなほ〳〵に忘れねばてう思ひも出でず
如何もして思を通じ例へ實にハ娶り得ずとも露の情を受
けたしと種々工夫なすといへど所も誰人の娘なるか夫さ
へ判然に知り得ざれば言ひ寄るとも休題て音信を聞さへ

適はざれは空しく市街を徘徊し若し逢ふ事もあらんかと
見廻るをりから折もよく今夕「プラザ、マヨル」の遊園にて圖
らず出會し婦人の危難傍觀ゆかんも有撃にて救ひし人と
思ひさや尋ね尋ねし美人の手弱女にてあらんとてアナ喜
ばしと飛び立つ計うりに思しが素より見識らぬ中な
れは袖を扣へて直接に思ひを述る譯にもゆかねはもどう
しさを忍び調少なに挨拶なし其のまゝ別れて右左り
投す方へと立ち去しが壯丁の失望いふはうりなく手の中
なる寶玉を失なひし心地せられて惘然と其場に佇立み立
ち去りたりし彼の美人の後影をは目送りて思按に組たる
腕を解き何ぞ心にうち點頭き頓がて彼方に歩行を轉じ兩

婦が跡を見ゑ隠れに足を迅めて追跡ゆきぬ开も此の壯丁も如何なる人かと尋ぬるに其の名を「マーチン」と呼びて印度人種なりといへども容貌風采殊に高尚く優等の思想を備へたる一個の壯丁なるが此夜の打扮は身に薄色の衣を着し頭にも麥藁の帽を戴だきて漆を欺むく黑髪も長く垂れて肩に及び雲の如くに簇がれり腰に纏へる革帶には腕に覺の一刀を鐺下りに帶たりけり元來無雙の手鍛錬にして優しき風采に似もやらず心飽まで剛あれば倘し北阿墨利加洲に至らんにハ「オンタリヲ」湖の遍歷人種英人の敵を防がんため必らず爭ふて之れを推し其の首領と仰ぐべしと思ふ程の人傑あり左れど思按の外なる戀の間

蹈み迷ふたる情の柵彼の「サラー」にも「アンドル、セルタ」と云ふ號婚の夫あるありて父は猶太人ある由をも爭でか慮り知るを得べき瞬たきもせず兩婦の影を見失なはじと瞪めつゝ足を早やめて跟けゆく程に朝夕山にて相識たる三人の同夥に出で會たり折わるしとは思へども外に避くべき道なければ餘義なく歩みを止めても眼ハ依然彼方を見つめ少しも他を見ざりけり三人の同夥ハ斯ともしらねば姿を見るより走り寄りれん身は「マーチン」君ならずや豫て知らせたまふ如く今夕は彼の山中に秘密會議を開くべき約束なれは吾々は則はち參會の途中ありおん身は今夕の會議席ふ臨みたまふの積なるか夫れとも臨みたまはぬか臨

みたまふとならは共に伴れ立ち參るべしと問はれて此方は心急くまゝ前後の思慮もなく素より臨席の心得なりと答ふる内兩婦の影は但在る邸宅の内に入りて忽ち見ゑずなりたり三人の同夥も詞ひとしく「マーチン」に打ち對ひおん身も何に見恍れたまふか會議の席へ臨まんとおらは誘たまへ參るべしと迫さ立られて心注さ余も素より今夕の會議に列席の心得なれど少と外ふ用事もあれは开を果して後時を移さず直に參着すべるほどにおん身等三人は一歩先へれ越あれと言捨て程よく其場を言瞞め三人を先へ遣り過でして獨りつくゝ思ふやう彼の娘ハ此の家に入たるを以て見れば此家の女に相違なしと「サミニエル」が

邸宅の門邊に來にけり折しも響く遠寺の鍾は午後十一時を告げ渡りて稍や更けうむる夜の色往來の人足全たく絶にて四下寂寞と鳴く蟲の聲のみ特り冴へうへる照す月光にすかし見れど我より外に人もなし登下「マーチン」は門邊に佇立み足を歇だて耳を澄し音もやすると内の樣子を右視左視つゝ窺がへど別に何等の便を得ず俺が戀ひ慕ふ其人は此の家のうちに在すうとれもへは我をうち忘れ惘然として立ちも得去らず門を睨みて佇、立みたり此の時さしも冴へかへる月も雲間に掩れてれほろ〳〵となるまゝに夜色いとゞ物淋たり折から彼方の叢林をれ〳〵分けつ居邸の内なり出るものあり這は不審と窺ゝ視るに清風一掃

村雲去つて月もろともに顯はれ出しは是なん一個の壯漢なるが人ありけりと見てけれは頓てヅカ〳〵「マーチン」の側に近付き照り渡る月に透して此彼齊しく互に顏を見合せつ彼の壯漢は怒氣を含み偖は汝も印度人よな今ま此の深更に怎く打扮殊に兇器を携さへて市中を徘徊なすのみか人の門邊に佇立むは果して何等の爲なるそ察する所ろ惡業を行おはんとての襯染なるべし」と言葉鋭どく云放てば「マーチン」は些しも騷うず俺們が先祖の地を蹈みて西に東に南に北に晝夜を問はず歩けはとて毫も差支あるべきようおく我が自由の足を以て我が自由に徘徊なすを汝は何故干渉なすか稀有おる事を問ふ奴うなと云つゝ呵々と

打笑へは此方ハ益〳〵怒を發し面色變て傍へに摺り寄り眼を瞑らし聲荒らげ汝奴隷の分際として傍若無人なる無禮の廣言疾く〳〵此の場を去らはよし尙ほ左に右と陳ずるに於ては目に物見せてくれんずと敦圍猛く罵り懲らせど少しも動せぬ丈夫の魂ひ答辭となさで顏を眺め天を仰いで嘲み笑へは憎さも惡〳〵と件の壯漢堪へかねてか一足後へ飛び退るよと見る間ふ晃乎と引きぬく用意の一刀電光石火の閃めく如く嵩に掛つて上段より曳と叫いて振り下す刀の下こそ地獄なれ此時「マーチン」の体は咄嗟眞兩斷と思ひの外此方も早く身を反し飛鳥の如く飛び〳〵さりて拔き合せたる氷の刄上段下段虛々實々前を拂へは後に在

り右に進めは左に退そる晝よりも尙ほ明らうなる月の光を便として丁々發矢と斬結ぶ白刃と白刃の晃めく影は波間を飛び翔ふ玉兎の如く奮擊突戰優らず劣らず五六十合打ち合ひしが一個の伎や勝りけん一人は肩先四五寸餘斬り下げられて動とはかり大地に倒れ伏しあがらも聲ふり立て賊あり〳〵と呼びたり此の物音の早くも家中に聞こはけん素破事こそ起りたれ出合へ〳〵と聲々に呼ハり〳〵五六人得物を携さへ動也〳〵と戸外の方へ馳出でたり首尾よく敵に勝を得て一太刀あびせ傷を負せ血振ひなせし一刀を提で突然と立たりける豪邁不撓の「マーチン」は此の体を見て打ち驚ろき手早く刀を鞘に納め逸足出して

雲霞忽まち此の場を逃げ去りけり邸の内より動也〳〵と立ち出で來り〳〵人々を怪我人ありと見てしうはいろゞ側に駈け寄りて能く〳〵視れは思ひきや日來親しく出入なす「アンドル」にてありけれは是は什麼と再たび驚ろき敵手は水夫か印度人か右へや逐ん左へ行かんといと喧まく罵り騒ぎ彼の此のと犇めくをりから靜にせよと制しつゝ立出來れる壹個の老人是れ則ち當家の主公「サミュエル」なり娘が婿の「アンドル」が傷つけられしと聞しうは驚ろき周章て出來り一と先づ負傷者を家の裡へ扶け入れよと命じつゝ追手の部署を定めたり

却つて說く「マーチン」は捕へられてと身の破滅と直走りに

走りしが逃れ出づべき城戸々々は既や十一時に締めきりて如何なる事のありとても政府の特命あらざるよりは都門の出入を嚴禁し翌日の四時に至らざれば假令鷄鳴の術ありとも逃れ出づべき便りあらねは流石大膽の壯丁も如何ハせんと且つ走り且つ考へて前に記せし橋上まで來りし時追手の追擊急にして曲者待てと聲々に呼はり〳〵追ひ迫る這は叶はじと逃げ出す前面へ巡りし市街の衛兵遣らじと道を遮ぎられ網に羅りし魚ならねは籠に捕られし林の鳥羽あらざれは逃るゝ道なく地を潛るの術なけれは隱れんと思ひもよらず進退茲に谷まりて脫れ果じと見たりけり爾れど「マーチン」ハ事に臨んで精神少しも紊れ

ざる膽力決りし者かれは些しも騷げる氣色なく徐々的に脫れ去るべき手段を默思へ心の内に悟り得たる事ありと見ハ獨り莞爾と打默頭き近か寄る敵を後目に掛け橋の欄干に寄るよと見ハしが川浪高く岸を洗ひ瀨枕たちて滔々と漲ぎり流るゝ「リマック」川の中央へ水入とはうり身を跳らせて飛び入れば潑と立ちたる水烟と共に姿はうたたの泡と消ハしゝ碎けしゝ其まゝ見ハずなりにけり追跡來りし人々は此の体を見るより聲々に素破曲漢は入水せしそ逃すなやるなと俳めく中より血氣に迅る惱り男等我こそ彼を手捕にせんと衣帶とく〳〵短劍を口に啣へて橋上より同じく水入と飛び入れは之に氣を得て水練ふ心得あ

る儕輩と我も〳〵と飛び入りて水底附なく捜ぬるあれは或ひは下流の岸邊に至りて水面殘らず探すもあれど絶て姿を見ねざりけり

第三回　老父强懲諸婚姻

單題「サミユエル」ハ二人の小厠に吩咐て鮮血に塗れて悶絶したる「アンドル」を扶け起し家の裡に舁き入れさせ寢臺の上に臥さしめつ急き外科醫を招ひ寄せて其の治療を依頼けるに醫師は委細心得て傷人の病床に至り疵所を篤と診察して夫々治術を施こし果て再たび元の坐に復りて偖て「サミユエル」に對ひて云ふやう疵と意外の輕痍にて少しも氣遣ひたまふにおよはず日數十日も經たらんには全たく

本復いたさるべし左れど介抱が第一なれは能く注意して充分に看護りたまへとて藥劑箱より數貝の膏藥を取り出して與へおき暇を告て醫師は其の儘家路へとうは回りたり「サミユエル」は之れを聞いて漸やく安堵の思ひをなしやがて寢床の傍に行きて醫師の指揮に任せつゝ彼の膏藥を疵所に貼り其の苦痛を慰さめなどして介抱等閑ならざりける元來この「サミユエル」と云へる漢は其性質甚はだ良からぬ者にて仁慈を知らず理義に疎く我あるを知りて人あるを知らず貪欲非道の白徒なれは先年其の本國に在りしとき不正の品物を賣買して一朝大利を占領し俄かに夥多の金を得て有福の身となりしかは心ますゝ增長して人

を見ると芥の如く或ひは高利の金を貸し附け或ひは奴隷を賣買し貸金を促るとき最とも緊しく尙し一日一刻にても返濟の期を誤まつどきは家とも云はず道具とも云ず時に應じて奪ひ取り甚だしきに至りては衣たる衣服を剝ぎ取るかと兇暴無慘の良からぬ擧動いよ〳〵ますます多かりけれは人々何れも爪彈して彼は鬼なり惡魔なり人間社會の害物なり否々利欲を皮とし骨とも成立たる一種特別の動物なりなど人々樣々に批評なし并も彼は金あるため此の社會に生れ來れるう又い人あるため金の出來たるかと問はゞ恐らくは之に答ふるの詞なうるべしとまで評判さるゝに至りたり斯る有樣あるを以て有繋に已が生

れたる故郷にさへも住み兼て人に逐ねど邪曲たる心の鬼に逐ひ退られ我から移住の念を生じ妻子を連れて夜逃同樣此の土地へ來りしは十年前の事なりけり左れども金のあるが爲め「サンラザロ」の外構にいと宏壯なる邸宅を構へ奴僕夥多を召し使ひ金貸をは本業として何に一つ不足なく世を安樂に送りけるが往昔の癖と性來ら窮けたる强欲の所業とは猶ほも止まざるのみならず一層其の甚太しきを加へ不義の財を貪ほりて庫に滿れど飽くことを知らず不正の所業數あるものゝうら何れも狡猾の手段を行なひ巧みに法網を洩るゝがゆゑに一度も失敗したることゝ斯く數年を經るほどにはくく運の好きものにや次第〳〵に

出世で今では陶朱の富をも凌ぐ威權鋭どき貴族等も皆な金力に壓服せられて陰では悪様に云ふものゝ面は忽ち蹤巡して此の「サミュエル」に抗禮する者絶にて一人もあらざりけり實にや富みて奢るとは所謂る小人の常なるが奢侈日に増長して今までの家屋も狹隘なり一層宏大ふる家居を構へて我のみ富貴に誇らんと新たふ大厦高樓を幾千となく建てつらね壁に珊瑚は塗らざるも室内の裝飾も善美を極め美麗壯嚴至らざるなく庭園の眺望樹木の植込殘る方なく整のふて目を驚ろかすはかりなれば其評判理麻府中に喧ひすしく誰とて「サミュエル」が豪富を知らざるなく誰とて「サミュエル」が驕慢を憎まざるなし此の外にまた

「サミュエル」が名を著はせしも即ち彼の「サヲー」ふり父に從かひ本國より遥々此の地へ移り往しは漸やく八歳の春にして未だ咲きそめぬ蕾の花去れども具はる天然の美貌は蔽ふべくもあらずいと臈蘭て見にしにそ之を見るもの歎嘆して理麻の人形とそ稱へける幼稚きとさより斯の如き稀代の麗質なるを以て其妙齢にふるに及びては花の顔色とまず〳〵美ハしく柳の腰もいよ〳〵細りて風にも堪にざる優風情芳樹漸やく花を結び新月將に粧ほひを凝らす夫よりも猶ほ嬋娟にて往昔邊塞の月に彷徨ひ馬上に琵琶を彈じたる王昭君が面影を止め春宵宮に媚を呈して吳王の魂ひを銷かしたる越の西施が彩風を殘せり爾れば一

たひ之れを見るもの思ひを懸ずと云ふとなく或ひハ婿にならんと言ひ入れ或ひハ婦に娶らんと日毎に傳手を求めて婚儀を求むる人あれど結納金を出さんと云ふ好き口のあらざりければ强慾無雙の「サミュエル」は爭う之れを承諾ふべき皆な拒絶て之れを卻そけ絶にて其の乞を容れず空しく光陰を過すうち彼の「アンドル」が何時の程にか「サラー」の姿を垣間見て戀々の情堪ねがたく漫に戀路の闇に迷ひ此の美婦人の爲ならは資産も性命も惜まじと日來親しく「サミュエル」の家に出這入なすを幸はひ切なる情思を打ち明けて何とぞ令娘を娶らせたまへ其代りには十万「ピアスタア」(一ピアスタアハ凡そ我が一圓二十五錢に當る)の結納

金を進らすべしと慇懃を以て誘ひなひけれは此方と素より待ち設けたる事なれは娘の心は問ひもせで我一人承諾したる旨を演べ娘は御身に進らすべしと婚儀の約束を結びける是ぞ「サミュエル」が左も殊勝氣に「アンドル」を介抱おす所以ぶりと看官宜く察し玉へ爾るに「サラー」ぞ父と異なりて其の心志清けれは平常に父が所業を看て片腹いたさとに思ひあらずもがなと身を不樂つ諫めて聞るべきにあらねは只だ室にのみ籠り勝にて鬱々として暮せしに此頃聞けは父親には結納の金に眼眩みて我が身には露ほどの相談もなく言ひ聞けなく假令親子の間たりとも此事ばかりは別ぶるを恰かも我が身を處するが如く父一個の了見にて

「アンドル、セルタ」とう云る者を心にあらぬ夫定め早や約束を仕果しと知りて胸先づ潰れつゝ口惜さをしたまひしと深き思ひはありぞ海の浪間に隠るゝ石ならで人しらず袖を絞りをりしが父の命令を今更に背くべくもあらざれは什麼にして宜らんかと彼を思ひ此を考へむら立ち噪くむら肝の心を獨り痛めしが天爰に良縁を假して圖らずも才子と稱るゝ「マーチン」に逢しめたまひ一二度出會したりしも親しく言葉を交すべき間なくて名残惜しく右と左へ別れしものから奇にうらまる赤繩の繋がるところ爭ふべうらず互に思ひ思はれて結びも果ぬ惡因縁「マデーラ」河の泡と消えて末世に浮名を流すに至る實に怪しきも

縁なり

却説「サミュエル」と「アンドル」の枕邊に坐を占めて懇切に問ひ慰さめ種々介抱なす折ふし坐敷の扉を靜づかに開きて入來る者のあり誰かと見れば家隷の心利たる某甲なるに「サミュエル」と言葉急しく最早曲者を捕へたりや容子如何にと問けれは某甲と首部を打ち掉り否未だ捕へはいたさねど多分い自滅を取しおらん开を委しく言上せん昨夜彼の曲漢が逃げ去る跡より五人三人八方へ手配して嚴しく逐ひ駈け候らひしに彼は逃端を失なふて隠れ果べき樣あけれは遂に「リマック」の橋上に顯はれたるより吾々一同急に追擊いたせしに折よくも彼方より市中の衛兵來りた

れば彼等にも應接を乞ひ前後より迫ひ迫りしが彼は進退度を失なひ逃れがたしとや思ひけん逆巻く水に身を投じて姿を隱し候らひぬ頃しも深山の雪消ゆて水嵩平常に增したれは流れの迅さを矢を射る如く巖石さへも押流さるゝいと凄まじき猛勢なれは彼に如何なる水練ありとも免うるべくも候らはず必らず溺れて死せしならん偖て又た浮むともやあると今夜一夜は兩岸に見張のものを付け置きたれは假令彼れ溺死を免れて岸に上らんとなしたりとて全たきことは候らはじと聞て「サミュエル」は打ち首肯き能ぞ計らひまゐりつれ彼れ偖て溺れて死せんには是れ相當の應報にして自業自得と謂まくのみ开も彼の曲漢は何

國のものにて其名は何と呼ぶやらん心得たるかと問ふ詞に家隷答へてさん候らふ彼は其名を「マーチン」と呼びて印度人に候ふ由人みな語り候らひきと聞て「サミュエル」小首を傾ふけ其「マーチン」と云る奴こゝ俺が娘の眼をしば〳〵尾ーと聞たりし印度人にはあらざるゝと再たび問されて家隷は首を左右に打掉つ否下僕は今日初めて其の名を聞たる位あれは委しき事はしり申さず這は令嬢の娘母なる「アムモン」に問せたまはゞ事明亮に知れ申さん疾く召しよせて問はせたまへと云ふにサミュエル」は實にもと悟り早ゝ爰へ呼びまゐれとの詞に諾と家隷は額首あへず退そきける引き違へて「アムモン」は召れ應じて來りしかば「サミュ

エル」は近く招き今夕のことを我が娘のよもや知らざる事
をあらじ何故出ては來らざるぞと問へは老女ハ爾れはに
侍る爲に家内の騒立ちして何事おらんと室を馳け出てお
嬢さまのお部屋に參れは如何なる故かはしりはべらねど
痛く驚ろきたまひけんれ顔の色さへ蒼ざめて身動きもせ
ず居たまひしゆゑ卑婢も更に心を得ず其事故を語りたま
へと幾回れ尋ね申しても僅かに首肯きたまふのみにて果
敢〳〵しくも回答たまはず卑妾はもはや寢るほどふ倆も
行て息みやれと卑婢を懶うく思ひたまふ御氣色なれば是
非もなく心ハ跡に殘れども其がまゝれ側を離れ侍りしが
一切心得はべらずと云ふに「サミュエル」は嘆息し而て彼の

「マーチン」とかいふる奴には娘が是まで道路に於て滿一して
のありたるか其數ハ幾回にして其容態も什麼なりしぞと
忙しく問ふ程て「ルーサ」も少しく低たる頭をもたげ否しは
〳〵とはいひがたけれ三ヶ月ほどの前から街衢にては新か
見懸け侍りしゆゑ卑婢は彼を知りをれども卑婢を見
識るや否や千こゝ母さまはどうしたのと迫問にて
僅少かなり動揺ましは牛ほどとしたま
ひつゝあるを義を彼の部屋が助けて表に出れたまひ其
折の樣子こゝ別に變りゝもなくたりに濟はべりると
答ふる詞の何處やらに曖昧の點ありしかは「サミュエル」は
聞咎め膝れ一進めて聲鋭どく其間違とは如何なる事ぞ委

しく語れと責め問はれ今ハ包むに術なくて「アムモン」ハ恐る〳〵「サラー」が耶蘇信者の群に紛れ遊園内の禮拜堂を拜せんとして躊躇ふうち奇禍忽ち足下に起りて小變事に及びたる事の顚末云々と言語短簡に演べ畢れば「サミュエル」は怒に堪ゑず眼を活と睜らして媽母を撥たと疾視みつめ汝ら媽母の職として日來娘にうゝる事の不都合おさやう保育すべきふ左はあらずして教へ方の行届かざるより娘の品行れひ〳〵に惡くなり他宗の神を拜むが如き僻み心も出で來るなれ汝の樣なる不將の婦人ハ娘の媽母には傳け置きがたし疾く〳〵吾が家を出て失せと口汚なくも罵り懲せは「アムモン」ハ太く怖れて腹立の程はれん道理ふ

れど以來は屹度心を注け斯る不都合あらぬやう必らず注意けまいらすれば今度の處ハ幾回にも許させたまへと首を低れ酸鼻みて詫びれども一切聞かぬ老の一轍見るも中々汚らはし疾々此座を起ずやと聞入る氣色のあらざれは是非もなくおく「アムモン」は痿〳〵として行出けり偖も「サミュエル」ハ「アムモン」の言葉を聞き「サラー」が擧動を探り得て如何にも心に懸りければ他ながら容子を見んと頓て「アンドル」の枕邊を立ち出で娘の部屋に忍びゆき密に樣子を窺へは綾羅の衾に纏はりて娘ハ快よく眠り居たり折しも夜半の月魂は中天高くさし昇りて隈なき光皎〳〵と紗窓の下に差し入りて晝をも欺むくはうりなるを籬に咲る紅梅

は浮香を送りて馥郁と袖に薫れるゆかしさに「サミュエル」と我を忘れて「サラー」の臥床に歩みより寝顔つく〳〵眺むれは我が子ながらも見榮して色香を添ふる春の夜の櫻に照りうふ月の顔色現に美くしき限なり登下「サラー」は夢の中に如何ある事をや見たりけん頻ふ身体を煩悶つゝ口の裡にて苦悶〳〵と咳やく詞の其中に「マーチン」君よ「マーチン」君よと云ふ聲確乎に聞にけれは「サミュエル」は腕拱ぬき嘆息すると再三回頭を低て考へ居りしが惆然として出で去りぬ斯て詰朝に至りけれは「サラー」と遽忙しく寝床を起き出で「リベラタ」と云る下僕を呼び今より卑妾と所用ありて是非に行うねはあらぬ方のあれは疾々二頭の馬を牽

き出して待ちてをりね供には汝を伴なはんと吩咐けれきていう〳〵と己が居間に立ち歸り手早く寝衣を脱ぎすてゝ馬乘の扮打をなし眼深き帽子に面部を躲して再たび戸口に立ち出つ引き出したる手馴の乘馬に身を跳らして閃りと跨がり「リベラタ」一人を後に從へ〳〵「カラヲ」の方へと馳せ去たり爾るほどに「サラー」は馬の足搔を迅めつゝ頻に路を急ぎしかは程なく「カラヲ」の港に來りぬ折しも一艘の入船ありて荷物の水揚忙がはしくあから曳たる東の面に朝暾まはゆく差し昇りて海の面を照しつゝ自づと心長閑にて氣も爽快なるべけれど物思ふ身は風景も却つて憂を催すなるべし斯て「サラー」が何故に此の港へ來りしのと其心

を繹ぬるに別に要事の有るにあらず人目を欺むく計畧なれば暫し此處にて時を移し馬の頭を立て直して他の道より逸走り理麻を投てそ出行くに朝露の滋き玉鉾の道の小草を蹈み分けて只管馬を早めしほどに理麻の市中の盡所なる川の下流の岸ふ來りけり此所より河に沿ふて橋の邊まで來りけるに或ハ五人或ひハ三人處々に圍居して岸の芝生に集合まり燃へ殘りたる焚火を圍み又ハ松明に水を照して屯なすもの數多あり「サヲー」ハ故と知らぬ似して供に伴たる「リベラタ」に打ち向ひつゝ眉を顰め這ハ何事の起りしそと問へば「リベラタ」は心得顔に嘗昔の事の起原より偖や件の曲漢が浮び出る事もやとて开を見張の爲め人々

が屯集致して候なりと事詳細に語りければ「サヲー」は聞て打ち首肯き「リベラタ」に其樣子を猶も委しく問ハするに彌々溺れ死したるとは今更疑がふべくもあらねど未だ死骸は見當らずと聞より胸まづ轟ろきて豫て斯とは知りながら又た今更の事に覺にて心に泣けど聲立てられず血を吐く思ひを千萬無量逢て心を盡しぬる身はうたかたの泡と消ゆ返す由なき人の上切めては後世をも弔らえんと「セント、アン」寺に詣でつゝ彼の「ヂョーチム」に案内を乞ひ禮拜堂に進み入り身を平伏して一身に祈禱の念を凝しつゝ降り沃ぎたる涙の雨に手向の水も漲ぎりて我が戀人の後の世を弔らふ小女の心の中思ひやるだに哀れなり

第四回　衝流志士免危急

却つて說く「マーチン」は前後に敵を引受て逃るゝ道のおきものから少しも猶豫ふ時おらねは身を跳らして「リマック」河の渦まく波間に飛び入しが素より無双の急流なれは尋常の輩儕おらんには忽ち大海に押し流されて魚腹を肥すべかりしに彼の「マーチン」は血氣强壯に心剛おるのみならず殊に水練に妙を得て水を行を陸に齊しく自在に波間を潛り拔け泳ぎながらも思ふやう俺れ倘し川の下流に至らは忽ち追手の眼に注りて其處に逃端を失なふべし如かず一と先づ上流に上りて兎も角も野分せんと中流は迚も潛れねは岸に沿ふて遡ぼり但在る沿岸の叢林の陰に這

ひ上りつゝ身を屈ませ零時樣子を窺がひ居りしが又た熟々と思ふやう倘し彼の追手の者共等川の下流を詮鑿して俺を認め得ざるときも再たび此邊を搜索すべし見付られなは是までの苦心も畵餅に屬すべし今此の隙に上陸して寧ろ市街に身を躲さは彼等は必らず心付かず溺死なせしと思ひ絕に却つて安穩おるべしと思按漸やく決せしかは若左して衣類を絞り身准備なして直走りに的もおく走せ出しが小路は却て人目多くなるゝに怪しまれん大道を行くこと宜かるべしと大膽にも悠々と一條の街衢を投し前後左右を顧りみおがら行くこと未だ五町に滿たず但見れは向ひは一搆の堂々たる邸宅あり家の內には火の光影赫

羅どーていと明るく門の扉を開きてあり「マーチン」を足を駐めて樣子如何にと窺がふに此家を貴族の住居と覺しく今夕は宴會にてもありしものゝ數多の貴族等戸口に立ち出で各々主人に暇を告げて待せきたる馬車に打ち駕りり今や出で來る折からなれは是れ屈竟と心に點頭き早くも其混雜に紛れて門の裡へと忍び入り樹立の影に身を潛し て車の去るを待つ間程なく車輪の音高く軋りて皆な殘りなく歸りゆけは門の扉を堅く鎖して送り出たる人々は何れも奥へ退そきつ四邊寂寞となりけるにそ時機は宜しと「マーチン」ハ靜かに木陰を出で來り家の戸口に近寄りて些とも臆する氣色なく心太くも階を登り燈火の光明らかな

る一室を頓て通り脱け幸えひ人目あらされば暗室の裡に身を潛めて夜の深るを待ちけるに夜半の鐘の音遠く響きて家内の人も寂靜まり夜は沈々と更けわたれは「マーチン」はやをら身を起し窓の戸明けて月光に外面の樣子を窺がへは此處は後園にて好き逃道と見てしかは獨り心に首肯て窓の框に足蹈み掛け飛び下らんと「なしけるが後の方に聲あつて曲者待てと呼び止めたり呼び止められて「マーチン」は後邊を佶と見返れは容貌高尚き一個の紳士昂然として佇立み居たり折惡しとはれもへども素より不敵の「マーチン」なれは怖るゝ氣色更にふく泰然として歩み寄り腰なる短劍引き拔つ夏尚ほ寒き氷の刃を自分が胸板に押當

て君倘し我を賊ふりと官府に訴たへたまはんとならば俺ハ此處にて斃るべし在下今宵忍び入しハ止を得ぬ苦しき仔細のあるとにて決して賊の爲ならじと思ひ切たる爲体に彼方もしはしと押止め急ぎ窓の扉を鎖して再たび「マーチン」に打ち向ひ先づ短刀を納むべし開も御身は何人にて何故此處には來たまひつる仔細如何にと詰り問へば「マーチン」と形儀を正し申すも今更面目なく恥辱やかしき譯ながら在下は名を「マーチン」と呼び此の土地の民にて候らふが今夕圖らず戀の意趣にて斬り掛られし鋭どき刃を徒手にて支へ兼しかは同じく刀を拔き合せ暫らく雌雄を爭ろふうち焦ちて擊ち込む在下が刃を彼方は受け損じ肩尖深く傷つけたり此物音を聞き付て顯はれ出たる數多の人々皆ゐ在下を捕へんとて緊しく追跡け候らひしが此樣箇樣の計畧もて辛く此處まで逃け來れり今や在下が五尺の身体を網に羅りし魚ならねは狩場の雉子に異ゐらず運は御身の胸に在り心のまに〳〵計らひたまへと怯ず臆せず物語れは御方は聞て感嘆し能ぞ包まず語られし斯てこそ大丈夫の磊落なる氣性なれ夫とは知らず曲しと呼び止たりしは俺が疎忽必らず心に掛けたまふゐ俺ハ「ドンベガル」と呼るゝ者にて貴族の端を汚す者なり窮鳥懷裡に入るとき は獵夫も之を捕らずとかや爭でか御身を訴人して己が功を貪ぼる如き卑怯未練の擧動なし天下の英雄に嗤えるべ

き必らず心を安くしたまへ命に換て在下が屹と隱匿まねらせん翌日は幸はひ「コリロス」の湯治場へ行うんと思ひ設け既に準備をなしたれは御身も車を共にして我と彼所へ赴ふきたまへ爾あらんにて誰ありて疑がふものあるべからず夜もはや太く更たれば暫しなりとも睡眠て宵の疲勞を休めたまへと飽まで義氣ある親切の詞に「マーチン」そ喜こび勇み地獄で佛と謂も斯る時にてあるおらんと深く其厚意を謝し何分共宜なに計らひ玉へと云ふより外そ返詞とてもあらざれば「ドンペガル」ハ「マーチン」を頓て客間に伴ふひ寐具を與へて密やかふ翌朝を契りつゝ己の居室へと退ぞきける偖翌朝に至り「ドンペガル」侯は例の如く朔

拜をなさんとて馬車の準備を命ずる前に「サミュエル」に要事あれは來るべき由云ひ遣りつ車を急がせて「セント、アン」寺に來りつゝ但見れは拜殿の前にまだ年壯き一人の美女身を平伏して何やらん頻に神を念ずる容子のいと哀れ氣に思ひけれは侯は早くも之れを認め問はで過ぎんも有繋ふて頓て其の側に寄り言葉を懸んとせられしとき住寺「ヂョーチム」ハ出來り斯くと見るより遽はしく侯の前に馳せ來り暫らく待せたまへゝ此なる婦人を先の程より一心不亂に神の利生を念じをり候らへは搆へて妨害なしたまふな既に説教も始まりたるに疾々本堂へ入らせたまへと迫き立つゝ娘に夫と目配なし本堂の裡へと入にけり侯も

今更詮術なく説教場に臨席して時移るまで聽聞したまひ頓て説教も果しかは待せれたる車に駕り我が家を投して歸りたまふに早や「サミュエル」は先の程より來りて客室に待ちて居り早速居間に召し寄せて寒暖の挨拶も終りて後候は「サミュエル」に打向ひ俺れ今急に故ありて三万「ピアスタア」の金なければ是非とも叶はね事あれば例おから氣の毒なれども此の一箱の寶石を抵當として少しの間用達てくれよ利息も望みに任すべきにと宣まふ詞を能も聞かず「サミュエル」は苦笑ひして殿の仰に候らへど斯る巨額の金員は容易く御用達がたし中々斯の抵當にては半額にだも足り候はずと聞て候は再たび云ふやう倘し此の抵當に

て不足とならば俺が所有なる「カズコ」の地所をも此の抵當に入れべきなりと云へは「サミュエル」首部を打ち振り今まで土地を抵當に取り夥多の金圓を貸し出して損耗せしと尠小らねは地所の抵當ハ望ましからず此の御相談ハ幾重にも御用捨を願ひたしと人望なく否むを押し返し然らは此なる寶石のみにて幾干貸し付け呉るやと問へは「サミュエル」懐げに懐中探りて秤量を取出し箱を開きて寶石を一ヤ量りて尚もよく手に取り上げ右視左視元の如くに納めて入れて這は寶石にハ相違ふけれど其質尤とも粗惡にして左せる高價の品柄ならねは仰の通りにハ參りがたし精々貸賽らするも一萬金に候らふと云へは候は怒を含み左程

の金子を何にかせん是非三万金の金子なければ俺もほと〳〵當惑なすゆゑ異議をば云はず貸しくれよ俺れ此の家をも抵當べきにと和理なく請れて「サミュエル」を有繋に推辭かねたるにや爾程までに仰せらるゝ上は些と當らざる抵當なれど平常の御懇意に愛で枉げて御用立申すべし去ながら事新らしく申し上るまでも候らはねど必らず共に返濟の期限に決して過りあるやうと言せもあへず「ドンベガル」侯は开は委細に心得たりと喜てぶを一と方ならず率て証書を遞與ければ「サミュエル」は携さへ來れる革匣の内より三万金を取り出して侯の前へに幷べける取引全く濟けれは「サミュエル」は他にまた用事ありとて挨拶ろこ

〳〵暇を告て忙がはしげに戸外さして立ち去しが「ドンベガル」侯は客舍に來り「マーチン」の樣子を如何ふと見るに首を低て不樂しげに默然として居たるにぞ頓て其側に近寄ていうに壯丁と呼びたまへは「マーチン」は茲に初めて人の來れるを知るものから頭を擡げて侯を見つ忙がはしく禮を爲して猶も昨宵の喜こびを述べ再たび侯に打ち向ひて實に某下が戀ひ慕ふ婦人と云へるは別人ならず只今此家へ參りし彼の「サミュエル」が娘にて「サラー」と申す者なりと聞て侯は只と呆れ御身が慕ふ其人は貴族紳士う但し又た豪商豪家の女ならんと思ひの外なる猶太人の娘にてあらんとそ偖も〳〵とはうりにて暫しそ言も出ざりしが霎時

ありて「マーチン」に對ひ何は右もあれ彼是ふすうち時刻移れは今より直に湯治場へと赴むくべし何角の事も緩々と車の裡ふて相譚はん早々準備をいたされよと急立られて「マーチン」は心得侍り候と答へもあへず手迅く衣服を更ためて準備十分整のへつゝ侯の車に陪乘して馬に鞭うち「コリロス」の湯治場投して馳せ去りける抑々此の「コリロス」といへる所は理麻より凡う道の程二里半可隔たりたる海濱の一村落にて海水浴の湯治場あり爾れは夏季には浴客殊に多くして其繁昌一と方ならず且つ理麻府中にて禁ぜられたる各種の遊戯場も此地に限り公然開くを許されたれは金錢を賭て輸贏を爭ふ者踵を絕たず競ふに此地に輻

湊るより尙ほ一層の繁華を加へ婀娜なる美人の玉手の裏に千金の財を拋うちて豪を買ふの遊冶郎もあれは夥多の金錢を持ち來りて雌雄を爭ふふの賭客もあり這ハ是れ夏季の光景にて今ま十二月の節季に際し訪ぬる人もいと稀なる昨日の繁花は今日の夢里に曲突の烟なく路に行輪の聲ふしと昔の人の詠ぜし如く寂寥れ果たる風景は世を忍ぶにも便よーと侯と「マーチン」の兩人は海邊に立たる閑靜の家居を一軒借り切りて見る目もいとゞ遙かなる水や天なる太洋の八重の汐路を朝夕に打ち眺めつゝ心の塵を拂ひ世の憂き事を忘れ居たり斯も茲の「ドンベガル」侯の先祖と云るハ當國にて最とも古き西班牙人の一家にして正系

連線として絶にざれば人々深く之れを敬まひ尊ぶら顯要の位地を占て常に要路に當る身の威權もをさ〳〵盛強りしが政府の更迭屢々にして朝晴暮雨の有樣かれは富貴も敢て特むに足らず權威も亦た誇るふたらずと深く浮世の塵埃を厭ひ國事の議論に關からず只だ重要の事ある毎に時々政府に立ち出て彼此意見を述るを以て其の身の職務とせられける又た其の財政を如何にと云ふに權力尤とも强盛き昔時と頗ぶる富豪を極めたりしが一旦社會を拋擲するの念慮を起したまひてより其の勢力の衰ろふに從ひ家産も亦た衰頽して所領は悉く人手に渡り今や家に贏石の儲蓄さへも無きまでに零落れ果て妻なれど妻努の

煩悶なる上に西班牙人の常として物に動ぜぬ性質なれば更に之れ等を意に介めず磊落の氣性活潑の擧動優悠光陰を送りしが圖らず「マーチン」に邂逅て剛邁活潑の議論を聽き不羈獨立の精神を愛で壯年の客氣再たび燼て慷慨の情禁じがたく老木なりとも今ま一度盛りの春に出逢ひなは一ト花咲せて眠りたる社會の眼を攪しくれん早く時機の來れかしと私に心を決めしが西班牙人ハ自負心强く共に事を圖るに足らず爾りとて中等の人民等ハ傲慢自放極まりなく勢ひあれは則ち集まり勢ひなけれは則はち散ず行なふ處ろ無謀にして說く處ろは過激に失し稀めく程に事業を成功らず謂所る烏合の者共かれは一定の規模もな

く之を統んと容易ならず好一一旦は統べ得るとも瞬時にして離散せんと鏡に掛て見るが如し單り友と語るに足るは往昔「ピザロ」の兵に抗して非常の切績を顯はしたる印度人の外にあらずと彼を評し此を論じ自から問ひ自から答へ心の裡に種々樣々の計畫を爲しつゝ獨り心に點頭き居たり斯て「ドンベガル」侯は江湖の題評を探り聞くに「マーチン」も既に死したりとの風評專ばらなりければ心安堵して猶ほつく〳〵と思ふやう俺れ既に義心を以て彼が急危を救ひしうど猶ほ婚姻の一難事あり倘し「アンドル」とか云る者に「サラ」を奪ひ取られなは彼が日來の性質にて爭で う命を全たふすべき俺れ「アンドル」に先立て「サラ」を彼に

娶はせずは佛作りて精神を入れざるに異ならず是非に此媒介を爲さんものと胸を決めて「マーチン」の樣子を細うに窺がへは快々として樂まず垂れ籠てのみ日を暮し更に浮き立つことにぞ話頭を轉じて慰さめんと有一日慨然として「マーチン」に向ひ御身の祖先は世に有名き彼の「マニュ、カバック」とて愛國の情胸に滿ち獨立の精神堅かりしうは人皆な勇士と敬まひ畏れ今の世までも英名を遺したるにはあらざるか斯る勇士の末葉とて御身は雄飛の心ふく他人の壓抑を甘んじて常に屈伏せらるゝ歟と云れて「マーチン」首を打ち掉り爭でか爾る事の候らふべき自由は人の欲する處權利は人の貴ぶ處俺等は常に薪に伏し膽を嘗

るの苦楚を受け會稽の恥を雪がんと同心一致なーたれども時權至らぬを奈何せん之のみ遺憾に候らふ扨し今にも時機來らは忽ち自由の旗擧して歴制を極め苛政を行なふ暴官汚吏を誅戮ーて平等の制度を立んと遠き事には候らはず其時こうは救れたる私恩は私恩公の敵にて洩れぬ御身も亦た我等が矢尖に罹るべーと憚かる色おく演けれは侯は莞爾と微笑みつ御身おらでは此言を俺に對ーて云ふ者あらじ夫でこう革命黨の首領と仰がれたまふべし俺れ熟々思ひ見るに御身們山中に楯籠りて密に戰爭の準備を整のへ兵器彈藥を準備して隙を窺がひ不意に起り理麻の市中を襲へばとて勝を得ること難からん开を如何

にと尋ぬるに今ハ賤民の勢力盛に只管亂に乘ぜんとす其有樣は鷸蚌相戰ふの隙を睨ひて漁人の利を博せんと企だつる者の如ー雨るをもて今御身等が無益の兵馬を動かーて徒に騷亂を醸するときは御身等には益なくて敵とし睨ふ暴官汚吏を首尾よく誅し得たりとも全体の利益は賤民等に得られて其功畫餅に屬せん夫のみおらず彼れ賤民等こう今でこう斯く屈ーて居たるも斯る有樣に立至りて一旦雲雨を得たらんにこう終に池中の物にあらず能く〳〵思慮ーたまひねと詞靜に難ずれは「マーチン」は聲を勵まし御身の駁論一應こう道理あるに似たれども只だ我ゃが望む所ハ國を救ふの一點なれば他事を顧みるに暇なし事に從がひ

運を試み我身の利益は顧りみず斯く申さは暴虎憑河死すとも猶ほ恨とせざる無謀の狂士と笑はれんが大丈夫が事を行なふや徒に後來の結果を氣遣ひ因循去就を決せざるは自から心に恥る所ろ成敗利鈍ハ天なり命なり決して今より測るべからず左にあらずやと詞鋭どく答ふれは侯ハ一ぱく打ち首肯き其志ざしハ然るとながら若し其機を誤まらば何を以てう成就せん機ハ捕ふべく逐ふべからず古人もかつて云しにあらずや着すく事の敗るゝを知りて事を擧るは宜しからず俺ハ御身を思ふと宛から我が子の如くなれは心の底を明すべし安堵て靜かに聽ねかし素我儕の先祖と云るは一時强大の名ありしかど今我儕の

代とふりて不撓の精神ハ地を拂ひ獨立の氣象ハ朽ち果て先人の名を汚したり去れば頭角を顯はして國土を平定するものハ御身們の外にあるべからず其の政畧を什麼と問ふに阿墨利加人の習套なる外人を嫌ふの卑心を去り大海の如き度量を以て洽ねく他國の役民を容れ事を圖るに如くもれなし徒に瑣々たる內亂は害ありとも其利なし篤と思慮あらまほしと云は「マーチン」侯に向ひ开は君の高論なれども印度人は飽までも誓つて外人を擯斥べし彼等假令巨艦を率ゐ海を埋めて寄せ來るとも一寸の土地を蹂躪し一掬の空氣を吸ふとさへ爭でう許し與ふべきと言ひ放ちつゝ愀然と憂色を含みて再たび語らず稍あつて大息つき斯

く立派には云ふものゝ今在下の位地を云は楚囚に齊しき身の上にて理麻の府中に顯はれなは忽まち捕吏の手に落ちて身首處を異にせん斯る危ふき身を以て再たひ理麻に入るときは日來在下が計較たる眞成の企圖も行なえず吁嗟國家の事と憂ふる者一婦人に惑溺して素志を得とげぬ朽惜しさと決心の色見えけれは侯も私に心を痛め如何にもして彼が望を果させんと思ふに付け理麻の容子を探らんと或朝「マーチン」を殘し獨り車を馳せて理麻に至り其樣子を探り聞に「アンドル」の手症も此頃にてハ殆んど全癒おーたれは日ならず「サヲー」と婚姻せんとの取沙汰市中に專ばらなり斯て侯は其の日の黄昏「ブラザ、マヨル」に歩み

を運び若し「サヲー」に逢ふことをやと群集の中を甲首此方と馳せ繞りたまふ際計らず「ヂョーチム」和尚に邂逅しうは私に「マーチン」の存名なる由を告げ云々と此頃の樣子を私語けるに「ヂョーチム」ハ其意外なるに打ち驚ろき且つ喜び以後「マーチン」の身に關して要切の事を聞き込みなは必らずれ知らせ申さんと語り合ふ折り彼方を過る窈窕たる天女と見擬ふ美人ありて侯ハ忽まち之を認めて彼ハ何處の人そと問ぱ是ハ「サミュエル」が娘「サヲー」なりとの回答を聞き心中大に驚ろけど爾あらぬ体にて「ヂョーチム」に別を告つ「コリロス」を投て引回へしぬ

第五回　士志侯屋圖擧兵

話說す「コロンビヤ」國の將軍「サンタ、クラズ」が部下の將「ポリバー」の兵敗北して邊境靜平に歸せしかは永く結んで解さりし兵亂頓に鎭定し國中事なきにハ似たれども其內情を探るとさは人心日々に恟々として妖氣常ふ地を掩ひ殺氣天に漲ぎりていつうは爆發なさんとす這は是れ貴族の專橫を怒り自由の主義に熱心し壓制の束縛を脫れんとする印度人の情況にて積日の憤懷正に溢れ愛國の眞情茲に發して忍はんとするも又た能はず不日自由の旗擧せんと攻戰の準備頻なり爾れは壓には巨額の金もて彼の「サミュエル」が有所船なる「アナンシエーション」號を傭ひ武器彈藥等を夥多に外國より購なひ求め「カリヲ」の港に入船なし辛く

も政府の眼を偸みて皆な山上に運ひたり又た市中に居を構へし有志者の面々と思ひ〳〵に容姿を變して敵の擧動を探り聞き細大一も洩す所なく常に連絡を相通じて山上なる本營へ一々密告なせし上しは〳〵秘密の會議を開きて革命の事を談じける其會場と云るハ但在る畫術の裏家にて最と怪し氣なる酒店なり主個と印度の婦人にて僅に馬丁擔夫なんどの賤業を營なむ者のみ花主となして酒を鬻き幽に烟を立て居れは奥の一ト間の明たるを幸はひ彼等に貸あたへて會議の場所とは爲さしめたり今日も會議のありと覺しく目標の竿いと高く屋の上ふ樹ちしうはこれを望みて東西なり聚ひ來れる印度人は孰れも賤しき營

業をなす車夫馬丁の類を始めとして看る〳〵間に五十餘名彼の後室に寄り集ひ長き卓を圍繞つ頓て會議を開きける此時一人の老翁あり忽ち屹然と起ち上りて座中を屹と見廻しつゝ今日會議を開きたる旨趣を演たる辯舌ハ滔〻として瀧の如く爽快なると水に似て抑揚頓挫其度に協ひ論理頗ぶる明晰なれは滿坐一統心耳を澄し宛から水を灌たる如く喝采拍手の其外に肅然として音もなく靜まり返つて聽き居たり开も這の老翁を誰とかする即はち「マーチン」が父親にて曩に「アンドル」に戯ふれたる彼の「サムボー」なり今ま演べ掛たる言葉を止めてしはし坐中の容子を見澄し頓て再たひ云ひ出るやう恁く各位が自由を愛で眞理

を好む精神を神も感應ましく〻てか爰に一個の秘所を賜ひ今までしは〻集會すれども未だ賊吏の眼に止らず犬に齊しき探偵吏の入り込む憂ひもあらざるこう返す〻も幸福なれ爾れは滿場の人々も恰かも分身同体にして行ふ處は各自に少しく變る所あるも其目的とし主義とする自由を望み平等の權利を得んと熱心する其事に至りては決して差違あらざるべく否差違あらざるなり此に依て此席も我々同志者が鉄壁と頼む別天地とも謂つべく壁に聞くべき耳さへなく堰利は此家の主人が鬻ぐ酒より外に口を拔うねは密議の洩れべき心配なし各位之れに懸念せず充分心胸を開暢して互に滿腔の熱血を吐露したまへと

言ひ了りて再たび元の坐に復れば衆皆な手を拍て快と呼ひたり登下一人の壯丁あり急に「サムボー」に打ち向ひ喃老爺公よ御身は爾來令郎の何たる音信も聽きたまはぬかと問れて「サムボー」首部を打ち振り否とは絶て手懸なし爾れども他の風評に依れば死せりとも云ひ死せざるとも云ひ諸説紛々として聞く毎に兎角一樣ならざれども曩に愚息が溺れしと云ふ橋下に人を遣はして川の中は云も更なり沿岸を盡々く探させたれは今に左右の報知を得て各自方が大將の生死の程も判然せんと最も愁とし氣に回應けれは何れも氣の毒に思ひて暫し説も途切たる折ころあれ中央に起ち上りたる一人の壯丁其容貌と眼圓と色黑く虎髯

左右に生ひ茂りて身の丈高く肥太り勇猛無双の有樣は依度に自づと顯はれたるが雷の如き聲をなし兄弟分等は何とう聞ける今ま「サムボー」老爺の云るゝ如く「マーチン」兄哥は俺們の大將と云ひ領袖と呼ぶとも智勇兩なから具備たれば能く其任に堪ゐらるべし然れども兄哥が昨今の擧動に就て見るとき尤とも疑念ふき能はず开も彼の兵器彈藥を積たる船の「カラチ」港に入津したる其時にも哥々は如何ふる心得にや知らざる眞似して其場に臨まず加之に「サンラザロー」の外郭にて一條の椿事を惹起し其儘姿を隱せし同盟の信義を欠き甚はだ不當の至と謂ふべし假令大將たり首領たりとも此等不都合の所業あるを罰せずして

捨てかは此後同盟を破りし者を如何して處置すべき兄弟分は何とか思ふ意見あらは聞まほしと憤然として演けるを大家誰かと能く見れは日來武勇の譽れ高く我人ともに鬼神と異名を附する剛の者「マナンガニー」と呼ぶ者なり「サムボー」之れを熟々聞き何の回答もなし兼て我子の不所存を辨護すべき道さへ絶たる内心は消ても入たる思して眼を閉ぢ首を低れ默然として居たりけり坐中の人もしさすがに心を兼て氣の毒さに互に眼と眼を見合せて可否の回答をなすものなけれはまする〳〵堰立つ「マナンガニー」ハ怒髮逆立ち天を衝き眼の光凄まじく言甲斐なき人々なるか其父此處に在れはとて其子の罪を論難し同盟の義を重んじて其膽を剛なるに足れ我々の責任なり公義の爲めに私交を割る朋友知己の間と愚なる子兄弟夫婦の情も割ける例は幾千ありしか人さへ事を遠慮して婦女子の輩に倣ひたまふ一歩を進めて論ずるとき其父の面前を避て密に其子の罪を鳴すは磊々落々を面目となす我々が主義に背ける卑怯の擧動未練とや謂ん臆病とや評せん其面前に於てするこそ公明正大恥のしらぬ丈夫の所業と謂はまくのみ最早諸君は先達て武器運搬の其當日海岸巡邏の警官と鬪爭ふたるを忘れたまひしか斯る必死の場合に臨みて自己れ何處へか姿を隱し親方の利害を顧みざるハ不義不信にはあらざるかこれをも忍ぶべければ又た何をも

忍び得ざらんと切齒をなしつゝ憤然として演けれは大家之れに勵まされ異口同音に道理と聲を放つて叫びける這時サムポーハ眼を擡げ相撲の言ふ事道理に協へり如何にも余が前を避の無禮の遠慮を爲して密に批評せられたらんには却々ふ[illegible]るもおきに流石諸君の淡泊なる能ぞ胸襟を打ち明られ[illegible]に罪なる愚息なれは直に捕へて相當に罰すべきハ勿論なれど其生死さへ知れされは這も亦た意に任せがたかり今ま暫時の間諸君に對し只管耐忍を願のみ兵器彈藥も既に已に古兒爾列羅斯の山寨へ殘らず運搬果たれは戰鬪の準備整のふたり只此の上は各位の粉骨碎身如何に在り勉められよと勵ませは何れも

躍然快と叫び暫らく鳴も止まさりける中に一個の壯丁あり勇壯の聲を震して老爺よ微妙も云れたり是れまでしは苦心おし準備全たく整のふ上は何とて遲々する事やとある一時もはやく義兵を擧て自由の旗を飜かへ平素の望みを達せんと素より期する所なりと腕を擦りて述けれはサムポーハ聞て笑を含み和殿の心志嘉すべし最早期日も近きに在れは厚く英氣を養なふて目に餘る功を立てたまへとは云へ會合の各位方にハ目指す仇讎を知りたまふかと問へは一人聲に應し开と今更に問はずもあれ先づ軍神の血祭りに我們が刃に斃らんものと日來我們を輕蔑し年來我々を禽獸視して傲慢不遜を極むる處の貴族の外に

誰やはあると云ふに壹人首部を掉り否ふ彼們より憎むべさは我們が土地を專有し我物顔に驕り慢ぶる彼の地主の儕輩ふり先づ彼等より屠るべしと甲論すれば乙駁し何時果つべしとも見ねざれば「サムポー」須臾と之れを制止め位の各方の云るゝ處ろいづれも一理あるに似たれど是れ則は ち一を知つて二を知らず葉を枯らして幹を斷ざるに齊しく到底無益の事ふるべし彼の地主と云ひ貴族と云ひ憎むに餘る白徒なるは事新らしく說かずとも各位方の腦底に怨望の念を固着して屠戮するに非ざるよりは決して滿足なしがたけれど皆な是れ枝葉の鼠輩にして齒牙に掛るに足るものゝは只た彼の賊官暴吏こそ根とも幹とも謂ひつ

べき深き遺恨の重なる者なり其の故は今を距ること凡そ三百餘年の往昔俺們が祖先は口惜くも彼們のために制服されし所有の權も身の自由も共に彼輩に奪はれて奴隸の如くに對遇れ其の子孫たる俺々も久しく壓抑の苦を受けて恁る次第に立ち至りしを素より知らるゝ所なれは今更乃翁が喋々を待たずして明白ふり然れは彼們は當時ふ至りて奢侈淫樂の結果顯れ苦財漸やく衰耗して暴富は昔時の如くならず日に〳〵傾ふく有樣なれど尤とも吾々が得まく欲する國家の政權は依然として今ま猶ほ彼們が掌裡に在れは苛酷の租稅を取り立てゝ己が遊戯に消費て下の疾苦を顧みず俺們天賦の自由權利を蹂躙なすは彼們なり三

百年來怨み重なる那奴們を一舉に亡ぼして遠祖の芳名を再たび顯さし社會の睡眠を一攪せば殘る枝葉の輩儕は風に偃伏す草葉の如く手を下さずして自滅するは素より理の當然なり左にあらずやと說き誇れは一同眞理と感嘆し須臾は肅然たりけるが稍あつて「サムボー」ハ「マナンガニー」に打ち向ひ斯く襲擊の時期近づき準備全たく整のふたれば只だ此上は相互に輕卒の擧動なさゞるやう注意に注意を加へつゝ機を窺まらぬが肝要なり既ふ「ガズコ」「ボリビア」等の同盟連合の人々も何時にてもあれ驚破と云は今が今に駈付て戰爭の期に合んと云ふ用意充分整のひをる由今朝到も彼方なり注進ありたり斯れは山中の人々も和殿と

同じく心を堅め和殿と齊しく武勇を以て日來覺ての本事を顯さし彼の古兒爾列羅斯の山嶺より落雪の如く蹇地に理麻の府中に亂入あし賊官汚吏を云ふも更なり我が目的を達せんとする前路に當りて妨害なる姻循姑息の奴原は當に任せて除きたまへ我們一同の人々が自由權利を隱蔽したる不正の曇雲を排除して自由の光輝を望まんとは諸君の力に在るありと勵まし立れは「マナンガニー」は欣然として打ち笑ひ老翁よ左はかり氣遣ひたまふな俺們同志は輩儕の鉄石を以て心に比べ資育を以て勇に誇り財を擲うち家を棄て妻子の事をも顧りみず擧兵の時節を相待つと一朝一夕の事にもあらず試みに市中を離れて步を郊外に

轉じ土はば熱心熱志の同胞等が齒を切しはり腕を扼て往來なすを見たるふべし『サンクトペテルブルク』『アマンゲス』等の『徐郎河』に至りなは皆な衣の下に劍を隱して非常の備へ怠たらは皆な書を賣りて劍を購なひ理論盡て腕力に雌雄を決へんとするの傾向は幾十年の久しきを知らず爾れは露兵の時至らぼ火の燃ける薪を燃やすが如く水の低きに就くに似て瞬く間に馳寄りて俺等は衆多の闘兵を得んと甚だ容易なりと聞て『サハ』『雀躍』おし开て尤も佳一日ならす果斷の處置に及はん今や『ポリバー』は兵を退そけ『サンタ、ダッ、ベ』は敗衂して外寇の患あらされは事を爲すには屈竟おり幸ひ今より日數を經は例の『アマンケス』の祝日なり既に諸君も知らるゝ如く此日は貴族の輩僚を始め暴官汚吏等の其外に我々一同が敵とする府中の男女も其日限の姓名と知らず祝場に續々として集合るを決して疑がふべきにあらねは再と得がたき好機おり依りて此日を旗擧の期日と定めて豫てより四方の同志に觸れ知らせ錯誤なき樣計らふべしと語るを聞より坐中の人々既に其期の至りしとて喜悅限なうりける此時三人の印度人戸外の方より室内にいと忙しげに入來るを見るより『サムボー』は濾たゞしく椅子を放れて起上り樣子如何にと尋ぬれば中なる一人答へて云やう俺々三人命令を受て兩岸より河面を上下凡そ一二里間細に搜索いたしたれど絶にて

形だにとるとおく死骸さへも見當らねは倘しや水底に沈みーまゝ石に死骸の狹まりて浮み上らぬともやと善く泳ぐ者を傭ひて周ねく水中を潛らせたるに更に見當らずと浮び出ぬ之を以て考がふるに河は名に負ふ急流なり殊ふ昨今の雪解にて水嵩いたく增しぬれは如何に善く泳ぎたりとて上陸せんを思ひもよらず大海の外に押し流され大魚の腹中をや肥しけんアナ傷ーやと告るにそ猛く見ゐても恩愛の情義は厚き親と子が頼みの綱も絲の糸も茲ふ全たく斷ゑ果て有擧剛氣の「サムポー」も泛然たるを半時計り人の見る目を憚かりて心に泣つ眼に笑ふ愁を隱す勇士の精神左あらぬ体にて坐中に對ひ最早會議も果てたれ各

位退散いたさるべー必らず油斷めさるゝふと云に衆皆心得ぬと目禮おして歸りゆく跡にハ「サムポー」と「ゝナンガニ」が卓子を中に額を鑽め猶も後事を語り合ふ「マナンガニ」は「サムポー」に對ひ小生よくく考がふれど「マーチン」主には彼の夜叉如何ある所用ありて「サン、ザラロー」に行られたるにや何とも以て心を得ず時と云ひ所と云ひ不審しきを限なし老爺には什麼に思ひたまふ心の中を明したまへと心あり氣ふ問ひ掛けられ長男の事にて斯までも人に疑團受るかと思へは「サムポー」遺憾に堪へず怒を含みて拳を握り眼を瞋らし誉ふるやう倘し和殿が推量の如く渠れ其德を一三にして已が良心に愧もせず敵に內應なす等の獸

に劣る行狀あらは假令此の世に存命へるとも捜ね出して我が手に懸け親が手自ら成敗して飽まで不信の罪を鳴らし又た彼と親しく交はる知己朋友も一人も殘さず屠り殺して禍害の根を絶ち乃翁も亦た自殺せん只得幾人を殺すとも我が種族に汚點を殘して可ならんやと聲震へして苔ふる折から當家の主婦が入り來り一封の書面を「サムポー」に遞與し這は誰人が齎て來しやらん卓子の上に在りたりと云ひ捨てて立出行けは「サムポー」不審の思ひして何事やらんと封れし切り眼拭ふて讀み下すに

いまだれんめもしも致し候らはねど是非ともおんねがひ申し上たき事御坐候まゝ不躾ながら文にて申し上げ

左樣に御坐候へは其の御子息樣おん事にハ卑妾か必死の難義をれ救ひ下されいろ〳〵あつさおん情にあづかり候海山の御高恩とべれは日に〳〵ろのれん身の上をのみ思ひつゞけ御嬉しき事に存じをりまゝらせ候ところ思ひ懸もおき此度の御災難承たまはりて驚ろき入り人の噂を聞き候に多くハ惡き便のみ相聞へ尙ほ〳〵心配のみ重なり朝夕あられぬ思ひにて只だ〳〵泣き暮しをり候もしやよきれ便りも御坐候はゞ何とぞ其の〳〵と〳〵して貴君さまの御腕へ赤き片の一と端を結ひ付け下されく樣くれ〳〵も念じ入り卑妾事は仔細ありてちさく〳〵おん伺ひもいたしこのね候果

敢なき身分の者に候へは絶にず人を以て貴君様のれん影身に附き添はせ只々赤き片をれんもるしと力草に賴みをり申し候くれ〳〵も此事のみひとへに念じ上げ先は右用事まであらく〳〵

さる婦人より

サムボー様おんもとへ

と讀み了りて「サムボー」は再三度嘆息し斯る婦人のあれはこそ其愛情に牽されて立し目的も達し得ず遂には身をも果せしかと思へは其身に招きたる自から釀せし科とはいへど慨然にも亦た慘らし夫に就ても憎むべきは愚息が心を亂したる此の婦人てう怨めしけれと怨もあらぬ人を

怨みて我が子の罪を隱庇ふこころ總ての人の親心愚痴にかれるも道理なり同じ事をは幾回とも繰返したる「サムボー」の呟く繰言を聞き居たる「マナンガニー」は暫し默思へ最と不審なる面色して开も令息を慕ふと云ふ婦人ハ何處の者なるかと尋ね問れて「サムボー」は低たる首部をやをら擡げ彼の婦人は我々と同種族の者ならず他種に屬する貴女なる由俺も親しく見たるにあらず吁嗟「マーヂン」よ如何なれは日來の氣象に似もやらず斯まで愚痴にはなりつるぞ悔しき事の限にこうと云つゝ又も嘆息すれは「マナンガニー」も嗟嘆に堪へず共に默して言葉なし暫時ありて「サムボー」え「マナンガニー」に打ち向ひ性根の底敗し悴の事を思ひ屈

するは恥うはー我は此より市街に駐まり敵の動靜を探るへけれは和殿は急ぎ山寨に歸りて戰鬪の準備をなしたまへと云つゝ椅子を放るれば「マナレガニー」も起ち上り共に後日を契りつゝ右と左に別れける古語に曰く千丈の堤防も蟻蠔の一穴より壞るると實にや計謀は密なるを以て善とす去れば印度人の革命党等は西班牙人の壓制を憤どほり身を殺しても自由を得んと深く謀り遠く慮んはかりて事稍や大半整のひしに豈に圖らんや密謀のいつしか洩て卑怯にも當國の大統領「ガムバラ」に密告せし者あらんとは抑も此賊を誰とかする即はち曩に巨利を貪ぼり我が持船を貸し與へて軍器を運搬なさしめたる彼の「サミュエル」なり

第六回　佳人嫌婚咽暗涙

話頭回轉且說「アンドル」も先の夜曩仇としらぬ戀の仇「マーチン」と鬪かふて負たる手疵も日數經て今は全たく癒しかは一時も早く戀人と二世の契約を結はんと心頻に焦燥つものから私に其父「サミュエル」に面會あして問ふべき事も數多く且つ婚姻の日ふ先立ち賭博をなして多少の金を贏まく思へば「サミュエル」に事の由を告げ知らせ共に車を急がせつゝ「コリロス」投て赴ふきける却說「コリロス」にても「ドンベカル」侯と「マーチン」の來りし日より間もなく賭場の開けしのは昨日の寂寥に引き換へて忽まち賑ハふ當地の光陰理麻に通ずる道筋には車馬駱驛として相望み繁昌一

と方ならざれども侯と「マーチン」兩人は結句懶き事に思ひ賭博場などへは足さへ向けず只だ胸臆を明ー合ふて羈旅の憂を慰籍めける又た「マーチン」は贋に及べは侯に暇を賜へりて毎日に客舍を立ち出つ海濱を東西南北逍遙なし還り來たれば只だ獨り己れの部屋に立て籠て窓に片肱つく〳〵と眺望はるけき海面を見つゝ只管物思ふ心の裡そ遣る瀬なき去る程に「マーチン」は「サラー」の事の心に掛り晝は幻夜も夢有撃に猛き心根も戀には思ひ益貞雄が踏み迷ひたる行路難他事を更に心に止まらず今ハ何ーて在るやらん人の風評にうれそとも聞まほしゝと一心に思ひ凝ては郤々に止まる由も渚こぐ海女の小船も夕潮に引れて家路

歸るころ西班牙人に身裝を變ー獨り旅宿を立ち出て心もなく足早に諸人集ふ山際の石坂投して登るほどには賭博場の前に來にけり但見れは昨夜よりの勝負にや疲れけん芝生の上に打ち臥て生体もなく眠るもあれは負けて悄然歸るもあり瞬たく間に千金を勝ち得て誇るも夢うつゝ勝つ勝れつ貪慾を焔に身体を焦しつゝ方寸の海に波立ちて家産の船の覆か一へす世にい白痴もあるものよと心の裡に嘲けりつゝ倘や噂を聞くとのありもやせんと賭場に入て那方を屹と見わたせは賭臺の前に直立て頻に勝負を爭ふものあり「マーチン」ハ何氣なく其人の顔を打ち見やれは胡爲圖らん過さし夜る「サンソヴロー」にて雌雄を爭

引ひ一刀の下に傷つけたる彼の「アンドル、セルタ」にして「サミュエル」も亦た側へに在れば是ハとはうり思はず後退に逡巡て驚ろきしが彼等を今しも賭博の勝負に心を奪れ其他の事を更に顧へらぬ有様なれは轟ろく胸をすし鎖め要こそあれと肚に問ひ胸に應へて場中の小暗き方に身を潜し猶も様子を窺がふに「アンドル」の運殊に悪く A と賭れば S と出て（A と S とを骨子の目なり）須臾にして輸たる事殆んど一万四千金ふ及びしかば心頻に焦燥て尚も大金を賭んとせしを側に立て最前より勝負の程を見て居たる「サミュエル」が固く之を止め無理に「アンドル」の手を把て戸外の方へと出行きしは彼の結納金の一條あれは斗を氣遣

ふての事なるべし「マーチン」も亦た跡に尾て私かに兩人が話し行くを聞とも知らず最初「サミュエル」の云けるハ兼て御身に話せし如く彼の「サラー」の身の上には奇々妙々の話説あり斗を御身に語らんにはいとも他聞を憚かれは容易の處にてハ打ち明けがたし何處へや行かんと心の裡に定めかねたる様子を見て「アンドル」しはし思按なし然る秘密の件なれは船を備ふて夫へ乗り海上遥かに漕ぎ去て聞く人もなき浪の上にて心置なく語うは如何にと聞て「サミュエル」横手を拍ち斗も最とも好し誘たまへとて伴立ちつつ濱邊の方に歩み去り小舟を備ふて共に打ち乗り迅くも櫂を繰つりて波間はるゝふ漕ぎ出けれは尾て來りし「マーチン」

と此に望を失ないたれど屹と尋思の胸を定め手早く衣裳を脱き棄て裸体に結ぶ皮帶へ用意の一刀挿すより早く身を跳らして浪間に飛び入り船を目的に泳ぎ行く此時日全たく暮て空には半輪の月さへ無く海の面いと暗くして咫尺の間も見分ねは折よりさと獨語きつゝ靜うに船に泳ぎ寄り耳欹だてゝ打ち聞くに初め「アンドル」の聲にて去れは如何ふる證據を以て娘の父ふる彼の人に「サラー」が實の娘なりと得心さする手段あるや心を得ずと難ずれは「サミュエル」は莞爾と微笑み开は氣遣ひたまふに及はず愛に娘を失なふたる仔細を曲に語りなは何條疑がふとやはある其仔細は今詳細に語るべけれは心を靜めて篤と聽聞たま

へ开は「サラー」の父と云るハ元智理國の貴族にて家族の外富榮へ豐に生活す者なりしが止みがたき所要出來て妻と襁褓の娘を殘し假の旅路を只だ獨り此の白露國に來りしが理麻の氣候の心に協ひ永住の念起りしかは故郷の妻に書翰を贈りて移轉し來よと云ひやりしに妻ハ大ひに喜こひて年來使ふ老實なる伴頭數人を從がへて家を疊み財産を處置し蝶よ花よと寵愛くしむ彼の嬰兒を搔き抱きて「バルバレイイゾ」を出帆する「サレン、ヂョース」と云る船に同行六人打ち乘て理麻に向ふて解纜せり當時斯く云ふ在下も智理の方に商用あり「て久しく同地に滯在しけるが此時用事も果しかは歸國せんと待さかへしも折も折とて便船のあり

ゝを幸ひ乗り組みたるに則はち此の「サン、ジョース」號にて端なく彼等と同船したり然るに海上恙なく早や半途を航り來て「シャン、フハンデス」の沖合へかゝる時一も運悪く波風急に吹き起りて船を搖り上げ搖り下し恰うも箕を以て攘ひるが如く激浪怒濤の其爲めに船ハ忽ち機關を損じ咄嗟と云ふ間もあらはこう舳の方ハ既に己に半分過まで沈没せしうは船中の騒動一方ならず乗組の人々色を失なひ生たる心地もなき折から水夫が卸す端船に我もくと先を爭うひ飛び乗る内に彼の夫人と在下のみは焦れはとて到々助からざるを曉り寧ろ此處にて潔ぎよく死を待つてう宜るべしと依然本船に止まりしが思ふに違はず彼の端船は山の如くに打ち寄せ來ぬ瞬間を潜つて潛ぎ拔けつ十間計も行うとおもへば逆巻く激浪に包まれて覆沒せしが破碎せしか姿も止めず失にけりアナ憫然やと人の事思ふも甲斐なき我が頭上に降りかゝり來る水難の荒雨沛然下し來て風さへいたく吹きあれつ浪ハますく荒くなり船を搖るゝ頻なれど機關ハ既に損じたり又た如何とも詮術なく風浪のまゝに漂よふうち遂に我等が乗たる「サン、ジョース」號の本船も暗礁の上に乗上しうは爭てかもつても堪るべき微塵になつて碎けたり此時夫人も在下も倶に浪間に溺れしが在下は幼なき時より水練は得意の業なりしかはイデ畢生の本事を揮ふて逃るゝだけを逃れて

見んと打ち來る巨波を事ともせず陸を目的に泳ぎ寄る其の鼻先へ浮み出ーは是れなん婦人が抱きたりー彼の嬰兒にてありーかは有撃に哀れを催ほして見捨がたなく思ひしかは其のまゝ小脇に搔き込みつゝ片手に波をかきわけて辛く陸地に泳ぎつき助け歸りし嬰兒は即ハち今の「サラー」なり去れは在下が命に代て救ひうへりー功ありて忽ち御身の目に止り十万金にならんとは思ひ設けぬ事なりさと語るを聞て「アンドル」は驚ろくと大方ならず斯る確乎な証據あれは今更何をう疑がふべき率とて革匣の口を開き約束の金を取り出ーて「サミュエル」の前に差し出せば欣然として受け納め一片の紙を取り出して証據を是にて候

ちふなり万一御身が貴族の列に入りたまハぬをあらは二倍の金もて返上せんと互に約束を固め終り頃て海岸に漕ぎ戻すにそ先の程より水中に潜みて兩人が話説をば事落もおく側聞せー「マーチン」ハ其言語の意を解し得ず思ひわひつゝ磯邊の方へ泳ぎ返らんとおーたるとき何うはしらず彼方より小山の如き黑き物の水を蹴立て來るものあり近よるまゝに能く見れは是なん一個の鰐魚ありさーも剛氣の「マーチン」も是ハとばうり辟易せーが素より氣敏の壯士あれば少ーも騷ぐ氣色おく遣り過して仕留めくれんと身を飜かへして水底に入り暫らくありて浮み上り遣り過せしと思ひの外惡魚は背後の方に在りて尾を揮ひ口を開

る只だ一と呑と勢ひ込で飛ぶが如くに逐ひ來るにそ距離既に近くなりて稍や達せんとしてけれは今は早や是までなりと腰なる短劍拔くより早く是もく波に刃の影映らふ下に寄せ來りし件の鰐の腹の邊りを刺も貫れと刺たれは海水忽ち朱に變じて惡魚ハ斃くも死でけり是ハ惡魚の脆きにあらず「マーシェル」の本事優れたる勇の程を測るに足るべし「マーチン」と始めて心安堵て急き泳き返らんとして那方を乾と見わたせは船ハ早や影だに見ゑず由なき惡魚に出會ひて餘程の時間を費やせしにや該の船を見失なひしか悔しき事をしてけりと悔れど詮術なきものから再たび水の底を潜りて十町餘り泳き拔け離なく陸に着しか

は手早く先に脫きすてる衣裳を把つて身に纏ひ左あらぬ体にて我が舞亭へ一目歸りハ還りたれど豐朝寐床を出るが否侯ふも一言の會釋もなくうのまゝ影を隱せしかは侯には太く驚愕かれ捨てれるがたしと其跡を慕ふて理麻へと急き行きぬ話頭一轉「アンドル、セルタ」と「サラー」と婚禮の當日も既に程なくあるしかは理麻の市中にては其評判殊に喧ひすしく貴女等は競ふて其席に臨み盛儀を祝し交誼を述んと頭の粧飾身の服裝ゑど別に新規の工夫を凝し我れ劣らじと競ひつゝ俳めき騒ぐ混雜は實に鼎の沸くが如し又た「サミュエル」が居邸にては其の準備類にして客間の飾り方花瓶の据ゑ方庭園の植込料理の臨梅其の日に至

り貴人を招待なして恥うーうらぬやう盛大に儀式を行なはんと壁にハ西班牙風の美麗ふる飾をな！窓の戸口には價貴とき光り輝やく織物を懸け香木の家財は處ろ狭くまで措きならべ其薫り鼻を穿ち廻廊には艶花麗草を懸け連ねて其の色眼を眩ますばかり結搆頗ぶる善美を盡ーて既に其の日も近づきぬれば家内の男女はいづれも皆な饗應の準備を調のへんとて出るもあれば入るもあり織るが如きの混雑を見るに付け聞くに付けいとゞ悲しさ増さり來る娘「サヲー」は只だ一個一室の裡に立て籠り晴るゝ間なき袖の雨ふりにし人とかりにける戀ーと思ふ彼の人は其行衛さへ知ら浪の底の藻屑と消ねたるにや若し幸そひに運

めでたく生存へたまふとなるかと今日まで危ぶみ居たりしか絶て音信もおまよみの甲斐なき頼みの「サムポー」が腕に結べる記標さへ見ずと告る「リベラタ」が言葉に望みの綱も切れ如何はせんと右思左考女心の一と筋に憂に沈む愁嘆悲哀人ころ知らねば沖の石の乾く間なき露時雨歎きの霧となるまでに深くも心を惱まーぬるまだ夫のみう淺ましや思はぬ人に思はれて父さへ婚儀を諾なひたまひ既に其の日も近よりたりと家内の人の噂するを聞くも涙の種となる世に美人と生れ來て心に染ぬ仇ー男に見ゆるとの悲ーさよ人生れて婦人となるおかれ百年の苦樂他人に依ると云ーとも未開國の習慣にて男女同權の行おはるゝ間

けゝ國にてあるまじと思ひし事も今日は我が身に類さるゝ世にも幸なる身の上や夫婦の緣ほど奇しくも自由ならぬ事となるものよと伏し沈みつゝヨゝと泣けど聲立られぬ籠の鳥憂をやるべも堰止められ只だ鬱々と暮すなる乙女心ぞ哀れなり鬱る中にも時經て早や當日となりければ「アンドル、セルダ」て戀人の心の内は知りもせで我のみ一人勇み立ち知己朋友は云ふも更なり假にも顏を見知りたる貴人とさへ聞くとさて婚姻の席に臨まるゝやう夫々招待の狀を贈り心宛かも狂するが如く自分は美服を着飾りて持物萬端贅澤と善美を極めし物のみを數多く粧ほひて意氣揚々と車を馳せ今日こそ多年の思ひを晴し世間の人にも誇り示し開が上「サミュエル」より領收たる彼の証書を證據として貴族の列に加はるべしと笑を含みて「サミュエル」が邸宅にこゝに來りける爾るほどに「サミュエル」が邸宅にては招待に應じて時間を違へず續々として集ひ來る數十人の貴紳貴女は門外にて車馬を下り案内の人に連られて設けの席へ居併びたり其供待の下僕等は門の前後に圍繞して車馬茲に市を爲せり頓て件の客人も暫時休息なして後再たび案内に誘られて婚儀を行なふ大廣間の式場へ立ち列びいづれも威儀を繕ろふて今にも花嫁の入り來らん今日は定めし意を込めて粧り立たるとゆゑに日來の美貌に驕まして尙ほ一層の美を添けん如何なる衣服を纏ふや

らん頭の裝飾ゝ如何ならんなど各自心に思ひわび待ちわびて今や遅しと待ち居たるが如何なしけん豫てより決たる時刻に至りても「サラー」は影だに見せざれば「サミュエル」の心配一と方あらず私に「アンドル」の顏を見れば怒氣滿面に溢れつゝ眼の光凄まじく憤然として扣へたり去れば衆客は此の有樣に何れも顏を見合せて更に一語を發するものなく一座たちまち白けゝれば「サミュエル」ますゝ愧ち怖れて背部に冷汗漲さらせ隈なく照す數千の華燭に面を合し消へも入りたる風情あり

第七回　壯夫乘夜奪佳人

却つて說く「サミュエル」の娘「サラー」は一人部屋に垂れ籠て彼を思ひ此を想ひ婚儀の大禮を擧んとて上を下へと立ち騷ぐ家内の樣子を耳にも懸けず落る涙の玉霰瀧なすまでに悲しみしが漸やくにして涙を拂ひ憂をやらんと身を起して廊下の欄干に憑りかゝり夕の景色を眺望つゝ我が身もともに暮れゐむるかと引き入れらるゝ心地にて漫に感情を起すをりしも向の樹立を押し分て此方へ來る人あるふそ誰ぞと見れば豫てより心の秘密を打ち明す下僕「リベラタ」なりければ僅に胸を撫で下して猶ほ其の樣子を窺がふに「リベラタ」は何やらん頻に茂れる樹間をは瞬たさもせず見つめをりしが忽ち後居に堂と倒れ是はと思ふ暇もあらせず一箇の人に組みしかれぬ「サラー」は見つゝ大に驚

ろう聲を立んと思ひしとき兩人は早くも起ち上り互に顏を見合せて偖ハ汝こそ御身なりしかと親しく言葉を交し合早や側ちかく進み來れり「サラー」は心に驚かりながら彼の一人の顏を見るに這はうも如何に日來より焦れ焦れし「マーチン」なれは是ハとばかり餘りの事に肝潰れ耻かしさと嬉しさに飛び立つはかり胸躍り顏ふ紅葉を散しつゝ暫し言葉もあらざりけり「マーチン」は徐ゃと「サラー」の前に歩み寄り言葉を正して云けるやう我れ曩ふ遊園にて御身の容姿を見染てより初めて迷ふ戀路の闇晝も幻し夜るは夢々ふ現うれん身の影常に眼前にちらつきて忘れねはこそ思ひも出でず絶に入るはうり慕ふでもれん身は豪家の娘伍

あり我は亡國の漂民にて其羈絆甚だしければ言寄ることは偖おきて顏を見るさへ便なく況してや思ふ眞情を運ばす手段のあるべきや斯ては此身が思ひ立つ事皆ふ畵餅となりゆきて死なば死ねよと嘲つなる愚痴な意を通はすべき音信も傳手もふくなりて水に燃ひ入る螢火の獨り胸のみ焦せしが遂に戀の意恨より仇にはあらぬ仇人に手を負せてそ逃去て途中捕手の人に追迫られ既に捕はるべかりしを辛くも水の底を潛りて彼處に潛み此處に隱れ卑怯にも未練にも我と見、心に耻ぢ惜うらぬ命を惜みつゝ今日まで生存ねたりしも是れみなおん身を思へはなり斯まで慕ふ我が心をれん身を惱しと思ひたまふう少しは憫然と思ひ

たまへと眞心見にて擂る口説は「サヲー」ハいとゞ耻かし氣に卑妾とても過し夜さり危ふき難義を圖らずもれん身に救はれ何事なく濟たるとさより思ひうめれん身の面影目前にのこり朝夕したひまねらせし卑妾とても同じ事其の眞心の輕重を斗量に掛て比べなは卑妾の方は重うりおんれん身が卑妾に逢んとて種々に心を盡したまひし其事實は能く知れり卑妾は夫にもいやまさる苦しき譯のありといへるも親の命とは云ながら心に染ぬ夫定め父も黄金に眼眩みて卑妾に一應の沙汰もなく今夜婚儀を行ふとて表坐敷へあの通り侮めく音ゑ聞たまもずやされど卑妾へおん身に立る操は決して破らじと心に結ぶ下紐を解かじと堅く否みしも早や其期は今夕に迫りて退引ならぬ當坐の難義今宣まひしおん身の言葉に果して偽りなきならは此厄難を逃るべきよき思慮を貸したまへ善惡ともにおん身の詞は決して背き侍らじと云つゝワッと泣き立る其聲高しと「マーチン」ハ制してしは〳〵打ち點頭されん身の心左程までに定まりたる上からハ決して氣遣ふともあらじ彼所に見ゆる「コルヂレラス」の山の彼方に逃げ行かは追手の來る氣遣ひなし左も去りながら軟弱きおん身の年久しくも住みたれし親の家居を跡に見て見る影もなき我に伴られ何處までも行きたまふの覺束なしと危ぶめは「サヲー」も潸然と涙を流し少しく怨める面色にて情なき事を宣ま

ふものゝ如な既に覺悟を決め侍れりイザとく〳〵と急立つる言葉も未だ終らざるに靴音高く踏み鳴し此方へ駈け來る人の氣勢に見付られじと「マーチン」は燈人フッと吹き消して人目を偷む早速の計策左右の相談なす間もなく矢庭に「サラー」を小脇に抱へ闇に紛れて庭口より飛鳥の如く逃去りけり

却説て「サミュエル」と「アンドル」の兩人は暫らく表坐敷に在りて「サラー」の來るを待ち居けるが何時まで強ても姿を見せねは不審に堪へず諸共に「サラー」の部屋に來りつゝ堅く鎖せし戸を押し開け進み入て是や哺娘何處に在やと呼びつゝ見れは箇は什麼黑白も分たぬ眞の闇人影更にあらざ

れは兩人は大に驚ろき呆れ箇は〳〵什麼にと許にて暫し言葉もあらざりしが稍あつて「アンドル」は怒りの聲音いと鋭どく想ふに今夜の爲体は必らず御身が指圖にて取遣せしに相違なしと云はれて「サミュエル」も總身に流るゝ冷汗拭ひもあへず爭でか爾る事の候らはん其証憑には在下が自ら「サラー」を捕へ來りて御身にお詫を致すべし遠くは行くまじ家來共とく我が跡に引添ひ來よと云つゝ外面に走り出れは應と答へて下僕等は主人の後に隨がひゆきぬ再説「マーチン」は「サラー」を奪ひ「サミュエル」が邸を忍び出て十歩を一歩と飛ぶが如く韋駄天走りに道を急ぎ豫ての暗号と覺しく一聲二聲口笛を吹き鳴せば甲首乙首の物蔭

より一てはらく〳〵と顯はれ出たる印度人其數凡そ十五六名皆な「マーチン」が前に來りて恭々しく目禮す「マーチン」は彼等に向ひ我れ故ありて此なる婦人を辛くも奪ひ來りたれは道を急ぎて山寨へイヂ赴むかんと宣示し彼等に「サラ」を擔がせて自己も後遂に引添ひつ行うんとなすとき後の方より否々山寨へ赴むかんより「ドンベガル」の家こそ宜れと云つゝ出來る人あるにそ驚ろきなうら「マーチン」ハ誰なるらんと振返れば即ち「ドンベガル」侯おり登下「ドンベガル」侯と言葉を更ため如何に「マーチン」君夫なる娘を暫時吾儕に預け玉へ斯く云ふも我れ御身を思ふとの切なるに依るおりと仰せたまへは「マーチン」も暫し考へ打ち點頭

さ如何にもれ預け申すべけれハ屹度保證したまはるべしと云つゝ頓に承諾て「ドンベガル」侯に「サラ」を渡し自分も直ちに其場より侯に別れて壹町餘來りし處何者かはしらねど多人數顯れ出で「マーチン」を中に取り籠めて物をも云はず搦め捕らんと無二無三に競ひ襲るを素より剛氣の「マーチン」なれは物々しやと右左前後に突退け蹴退け四肢を自在に働かせて些とも傍に寄せ付けず去れども敵も次第に加はり雲霞の如く四方より群り蒐れは「マーチン」ハ假令三面六臂ありとも衆寡爭でか敵し得ん怯む處を附入りて多勢上に折り重かり手取り足取り曳き倒し高手小手に縛しめられて「マーチン」は齒噛をなして憤と

ほり虎の如く吼り狂ひ疾々首を刎よとて罵しり騒ぐを彼輩は更に耳にも掛ずして頓て「マーチン」の目を蔽ひ拘引て

一軒の家の裡に伴なひ入れ始めて目隠を取り除けたり扨も此處は何處なるかと首部を回らして此室の様子を篤と見てあれば常に己等の黨員が秘密會議を開く場所にて正面の椅子に儼然と怒氣を含んで坐したるは是れ即ち別人ならず己の父の「サムポー」にて「マナンガニー」を始めとし機密に與かる人々等其の兩側に居併びたり百萬の敵をも敢て恐れず鬼神天魔をも取り挫ぐ剛勇無双の「マーチン」も孝義の二字を如何にせん我が犯したる不信不義一婦の色香に沈溺して大事を餘所にありたる罪を辨解すべき

の詞なく面目なさに擡げたる頭を再たび低垂て打ち萎れたる有様は哀れにも亦た殊勝なり「サムポー」は我が子の容子を熟々眺め眼を轉じ坐中の人々に打ち對ひ如何に各位聞きたまはれ世に我が子ほど親に對して不孝なる者はあらずかゝ今が今まで現世にハ亡き者なりと思ひ居たるに浅ましや烏滸々々と何處の浦にか忍び居て今日諸君の面前に來り其身は左も右親の身にうゝる耻辱を與ふるとは返すゝも憎くき奴なり今更云ふも愚痴なれど犯せし罪は是非もなし何故辨解をなすために露の命を捨ざりしぞと云ふ聲さへも堰あへぬ悔し涙に口籠りて千萬無量の意を籠たり「マナンガニー」は性質の氣象を茲に顯はして怒聲

宛ら雷の如く如何に我が黨の總理「マーチン」君は今夜も將に革命の義兵を擧くる前夜なるに如何なればこゝ親密なる親方の事を餘所に觀て斯も敵地に彷徨ひたまふ若し明日の戰爭に味方の采配合期せざるゝ或は秘密の敵地に洩れて事の敗北となるときは假令御身に一點の疑りし事のなきにもせよ彼は敵に內應して親方の敗れとなりしなりと疑團れん身に集まるとも言解く詞もあらざるべし否辨解も無益なり余が今詰り此論に返答あらは聞せたまと黨員總体の希望なりと再三再四繰返し詰れど問ど「マーチン」は差し俯むきて物云はず何等の回答もなさゝれば「マナンガニー」も堪へかねて右手に懷劍拔持ちて椅子を放れて

ずゝ〳〵と「マーチン」の側へ進み寄り箇程までに問ふといへど一言半句の答なさは一婦人に心を奪はれ五官も能力を失ふて耳も聾ひ眼も視へずロさへ啞になられしか斯まで無禮の暴言を放つも御身の利益を思へはなりと慷慨の餘情言語に溢れ感慨胸に迫り來て震ふ聲音も友義ふ厚き心の程てう賴母しけれ斯りけれども「マーチン」は木偶人に異ならず尙ほ默然として居たりける「サムボー」再び衆に對ひ手を下すは後にして先づ其の道理を論すべし我が子若し節を變じて我等同盟を賣ものならは我れ其の處置を猶豫せしめ然れども未だ證據あらず今若し彼を死刑に處しふは理麻府中ふ彼が頭を理むべき寸地尺土もあらざるなり

之に反して義を重んじ志操を改めて濟世の大切を奏したは英名長く竹帛に垂れ金冠頭に輝やくべしと心あり氣に演べ立る父の言語を聞よりも「マーチン」漸やく頭をもたげ口にハ夫といねども素より信義に富たる者ゆゑ奮然として志操を決し悔悟の色顯はれたり實にや市中の印度人は皆ゐ「マーチン」に心を歸して之がためにハ性命をも惜まず何れも其の命を聞かんことを欲しけれは今革命の際に臨み「マーチン」なくては適はじと豫て牒しおきたれは「サムボー」は命を下して其の縛しめを解かしめ再び「マーチン」に向ひて云やう明日は即ち「アマンケス」の祭日にて市中の賊吏纍官等いづれも皆な彼の山上に集まるべけれは此機を外さ

ず兼でより研ぎすましたる刄を揮ひ養なひ肥せし馬に跨かり敵の不意をは襲ひ擊て彼等を微塵に碎くべし其時我等を二派に分れて一手は「アマンケス」の山上に向ひ一手ハ府中に亂入して殘りし奴原を平らぐべし汝ハ此の二派の内好む處を撰ぶべしと云へは「マーチン」も些とも猶豫せず我ハ市中に向ふべし假にも我が鋭鋒に嬰る者は決して命を全ふすべき心安く思されよ從來思はず親方に對して不信の罪を犯したる其償却として「マーチン」が働らく樣を見られよと勇氣面に顯はれて言葉鋭どく言放ては皆ゐ顧み

ゐくそ思ひける

第八回　衆祭志士、擧義兵

抑々「アマンケス」の祝日と云るは六月二十四日にして毎年此の日に至るときハ府中の士民業を停み彼の山上に群集して遊び戯むるゝを例とせり爾る程に明くれば六月二十四日天氣清朗にして微風輕く枝を拂ひ飛び交ふ鳥の啼く音さへ血に叫ぶとそ心も注うず耳底清く聞こゝかば府中の人々群をなして互に祝ぎ喜こび合ひ打ちつれてこう足曳の山路をさして辿りける中にも金鞍の肥馬に輕うち優美に誇る王孫あれは光澤輝ゃたる玉車を軋らせて華麗を粧ほふ公子あり或ひは美人の手を携さへ狂蝶花ふ戯むるゝの狀をあす者あれは一家眷族打ち連れて旅雁雲を渡るの情況を呈ハす者ありいづれも下僕に酒食を擔はせ琴

彈く人を伴なひて紅塵歌吹の内を出で綠色うふ山間の草の畑を打ち過つ野を越ゑ林を潛りぬけて程なく山上に來にけれは皆な一同に聲を合せて動とはかりに鯨波を作り其の歡こびを表しける斯て府中の市民等は皆な山上に集合ひて携さへ來れる提笛を開き樂人をして琴を彈しめ或ひは謠ひ或ひは舞ひ今にも頭上に落ち掛る氷の刄ありそとも知らぬが佛の伽陵頻伽極樂淨土の快樂も之れにも過ぎじと思ふまで遊び戯ふる愉々快々時の移るをも知らざりける話頭廻轉單題「コルヂレラス」の山寨にては攻戰の準備區々にして軍馬宛から雲の如く劍戟恰うも林に似て各自武具に身を固め酒を飲み物を食ひ充分英氣を養なふ

て時刻遲しと待ち受けたる遠く望めば正に是れ殺氣も上りて天を衝き近く視れば腥風凜然面を掃ふて凄まゝく又た理麻の府中にては市民恐々く家を出てもぬけの殼に異あらず寂然としたる街々を彼地此地徘徊おすものはみな是れ印度人のみなり毎年此日は「アマンケス」の山上に集合ひ市民と同じく俱に遊び戯むるゝを例とせゝも今日ハ豫ての計較あれは市中の所々に散乳りて時刻の來るを待ち居たる例へて云へは爆發藥に挿たる引導火の次第〳〵に燃ひしきりて咄嗟今ま爆發せんとするに似たり爾る程に此等の印度人も次第に隊長の暗號に從ひ府中に就て尤も富盛を極め最とも繁昌を占る處ろの街衢を投ゝて集

まりけり斯て此日も暮れ掛りタ陽ハ山に春つきて忽ち光を沒せしかは是に代りて蔽ハれ居たる自由の光輝顯ハるゝともしる由あらぬ賊官汚吏等ハ思ひ〳〵に美服を着飾り馬に鞭うち車を軋らせ「アマンケス」に通じたる道の左右に群がりぬ折から響く耶蘇寺の時計の鐘を屈指れは午後六時を報じたりこれを暗號と覺しくて四方に起る鯨波の聲天に響き地に應て山岳も崩るゝ計りなれは暴官汚吏等は色を失なひ箇も何事と驚ろき周章て逃んと奔めく隊もあらせず這首の物蔭彼處の家より發遣〳〵出る印度人皆な物の具に身を固め手に〳〵得物を打ち掉りて早や街衢の出入口をひし〳〵と塞ぎたり續いて寄せ來る革命党

ハ數千の松明を振り照らし西班牙人を殺すべし暴官汚吏を遁すなと異口同音に呼ばりつゝ潮の如くに寄せ來り亂暴狼籍見るも中々恐ろしく四方の小高き岳よりは數千の援兵驀地に市中を望んで馳せ下れは今まで華美を極めし街衢も忽ち變る修羅闘場上を下なる市中の騒動目も當られぬ有樣なり革命党ハいよ〳〵ます〳〵喚き叫んで我れ先にと貴族の家に亂れ入りて人を殺し財を奪ひ火を放ちて燒き立れば折しも吹き來る山風に猛火炎々と燃ゑ上がる火焔は毒蛇の舌の如く烟の下をかい潛り西に東に北南當るに任せて荒れ廻る積年の怨憤一時に發せし印度人の兇暴ふるゝと旋風の舞ふも異ならず恐る中にも「マーチン」

は「マナンガニー」を後方に從へ一隊の兵に將として「ブヲザ、マヨル」の方を投し政廳間近く攻め寄せたり「マーチン」は馬を進めて彼方を佶と見渡せば何時の間にやら集まりけん大統領の門前にて一隊の軍兵備を正し銃口ろゝゐて待ちかけしが敵兵近く來るを見て一度に切つて放ちければ先に進みし印度兵は皆お樸地々々と斃れけり之を見るより「マーチン」は怒れる眼に血を灑ぎ髮さゝーまに竪ち上りて引くな進めと指揮すれは奏より必死の印度兵爭でか一歩も退ぞくべき此方よりも銃を放ち此處を先途と戰うへは兩軍の死傷夥たゞしく血は流れて涿鹿の野を浸し屍は積て累々たり彼れ擊るれば我れ進み我れ擊るれは彼れ進

む一進一退死生の前ふ雌雄を爭ふ奮擊突戰鋒尖より火出るまでいとも激しく戰うひとが死を決めたる印度兵の鋒先尤とも鋭どくして驛たく間に敵勢の一大隊を迫ひ崩し既に全勝を得んとしたる折しもあれ一手の敵兵いつの間にやら廻りけん後方にありて此時既に二臺の巨砲に型藥して喘嗟放たんとする有樣なれは「マナンガニー」も大に驚ろき倚し大砲を放たれなは親方の大事に及ぶべし彼等が擊さる其前に彼の大砲を奪ハされは我が敗北顯然たり誘たまへ「マーチン」主と言葉忙しく言ひ放ち既に行うんとふしけれども「マーチン」ハ何に思ひけん「マナンガニー」の云ふ詞をも耳にも掛けず馬の平首鞭て直ち進ひさちがへて

「ドゝペガル」侯が邸宅を投して馳せ去るにそ首領の心を解し得ざれど事急なれは問ふに暇なく數名の手兵も馬を飛して其の後邊に從がふたり此時後方に廻りし敵は二臺の大砲の火蓋を切り印度兵の中央を目懸て恰うも百雷の落ち蒐るが如く動とはうりに發ちけれは何かは以て堪るべき風に木の葉の散るが如く四散五散に碎けたり殘るは僅かに四五十騎「マナンガニー」を大將として必死となりて戰、かへども敵も元とより大兵にて次第々々に新兵加はり代り合ふて揉合ふものから我にも續く後詰かければ衆寡の勢力敵すべくもあらず遂に敗れて散亂せり再説「マーチン」は馬を飛して「ペガル」侯の邸宅へ馳せ付け來りて見てあ

れは早や我が軍の迅雄等は邸宅の門を撃ち破て動也〳〵と攻め入たり此隊の大將を誰うと見れは則はち我が父の「サムボー」にて「ベガル」侯ハ從者を指揮し自から劔を提さけて攻め來る敵と防ぎ戰かふ「サムボー」は日來より憎しと思ふ西班牙人を斬り殺さんず精神のみ頻に備る其の上に彼の「サラー」をも奪ひ去りて息子の心志を堅めんと豫て思ひ決めたれは激しく親方の兵を指揮して息をも繼せず攻め蒐る「ベガル」侯も年ころ者たれ素より聞ゆる勇將なれは僅少の從卒を勵まして死するまでもと戰かへども敵はまず〳〵勢力鋭ぎく隙間もあらせず攻蒐れは今は心神共に疲れて既に危ふく見にしかは「マーチン」爭でか猶豫すべき親

方の兵を突き除けて彈丸雨注の其の中を些とも怖れず駈け脱けつ侯の前に立ち塞がり大手を廣げて我が身を楯にし親方の矢面ふ起たりけり侯も再生の思ひをなし「マーチン」の手を執りて其の義心を喜こびたまへは「サラー」も其處に轉び出て嬉し涙に暮にける「サムボー」は之を見て怒の面色凄ましく戟を掉つて幾回う我が子を刺んと競ふになん「マーチン」も爰に至つて孝義兩ながら全たふせんと到底爲し難き業と悟り親に刃向ふ不孝の罪を犯すも不義の人とならじと思ひ決めて父と闘うひ傷つけぬやう抗抵ひ居たり爾れは「サムボー」を益す怒り彌々呆れて撃ち果さんと挑めども我が子「マーチン」の勇武に敵しがたく微傷だに負せ

得ず此の時「マナンカエー」も總身に滴たる血鮮を拭ひもあへず「サムボー」の側ふ馳せ來りアレ見たまへ彼方より「アンドル、セルタ」が兵を率ゐる小賢しくも來りたり先づ彼の敵を殲すべしと云へは「サムボー」も應と答へて「マチンガニー」と諸兵に馬を馳て進み近づき聲高らかに呼ハるやう「アンドル、セルタ」慥に聞け汝が妻ハ今ま現に「ベガル」侯の家に在り「マーチン」將に之を奪ひて山寨遠く逃れんとす疾く行かざれは及ぶまじ笑止〳〵と嘲弄し早くも後邊に引返せり是ハ「アンドル」を怒らせて「マーチン」と鬪ふはせ其の隙を伺ひて「ベガル」侯を襲ひつゝ「サラー」を奪ん「サムボー」が計畧とは知られたり「アンドル、セルタ」も之れを聞くより怒りの面

色朱を沃ぎ直に馬を駈け寄せて「マーチン」目蒐て擊て掛る必死の覺悟擧動に現はれ侮どりがたく見ゆたれは心得たりと「マーチン」も馬に閃りと打ち跨がり來れや應と受つ流し彼に猛虎の勇あれは我に飛龍の術を竭し千變萬化一上一下火花を散して戰ふたり兩軍暫らく戈を休め適晴劣らぬ勇士と勇士勝敗如何にと片唾を呑み手に汗握りて見物す兩夫は尙も丁々發矢離れては合ひ合ふては離れ優ず劣らず挑み合ひしが如何なりけん「マーチン」ハ手に持つ劔を地に落し拾ハんとして馬上から身を横たへし隙を狙ひ跳り蒐つて「アンドル」が上段より擊ち下す刃の下を潜り拔け飛鳥の如く飛び込みたる「マーチン」は咄嗟の間刃持つ手を

無手と捉へ鞍の前輪に引付たり引き付られて「アンドル」は力を極めて振り放さんと頻りに手足を煩悶ども「マーチン」が勇力に敵し得で見る〳〵刃を奪ひ取られ胸元深く刺されしうは叫びもあへず死んでけり「ベガル」侯ハ思はずも撃を揚て「マーチン」を爲たりや爲たりと稱めたゞへ些とも猶豫すべからず疾々山寨へ歸るべしと急がしたまふ其折しも「サミュエル」其場へ顯はれ「アンドル」の死骸を搔き探りて衣嚢の裡より何やらん一冊の手簿を取出し逃去らんとしてけるを目敏く見て取る「マーチン」が奸賊待てと大喝一撃跳り蒐つて右の手帳を奪ひ取りつゝ其の中より一葉の紙を引き出し「ベガル」侯に示しけるを如何なるものぞと之れ

を見るに左の文字を記したり

證書

一金十万「ピアスタア」也

右の金員「サラー」の身代金として「アンドル、セルタ」殿より受け取るもの也彼の「サラー」は我れ往昔「サン、ジョース」號破船の折拯ひたる者にて正に「ドンベガル」侯の一人娘なり若し之れに相違ある時は直ちに右の金員を返却すべきものなり後日の爲証書依て如件

と讀み終りて「ベガル」侯は夢に夢見し心、地しつ偖て「サラー」は我が娘にてありつるかと云つゝ奥へ駈け入て「サラー」を隱せし部屋に至るに「サラー」て影だにあらずして看護の爲

に附け置たる「ショーチム」和尚は鮮血に染みて其所に倒れ居たるが侯の足音に眼を開きて苦しき息の下よりも聲はり上げて云るやう「サヲー」と「サムボー」に捕らへられて「マテイラ」河に連れ行かれしと告げ終りて其儘に果敢なく息は絶へ果たり

百六十

第九回　斃矢旅魂長迷水

再たび説く「マーチン」と「ベガル」侯の兩人は「サヲー」を「サムボー」に奪はれしと聞より爭でか猶豫すべき直ちに其蹟を追ひ蒐んと麥藁の大帽子に面部を掩ひ短銳を携さへ銳を負ひ馬に閃りと打ち跨がり飛ぶが如くに邸宅を出で「コルシレラス」の山路を投して登りつ下りつ行く程に松柏枝を交にて晝猶ほ暗く怪石路に横たわりてしはく馬の蹄を傷つけ深谷遙に霧を生じて漫に人膽を寒からしめ突兀嵯峨たる山路の艱難積雪將に解んとして溪流大ひに水嵩を增し頽雪時々山巔より下りて其の危險云ふばかりなけれど恩愛戀慕の眞慎より行路の難義を事ともせず一心不亂に道を急ぎて晝夜を分かたず進み行けば靄雲遙に足下に生じ啼鳥既に聲を絶ちて海面より高きこと一万四千尺の所に來にけり爾れは旋風雪を吹きて忽まち馬の足を埋め朔風肌を侵して骨も凍るかと怪しまる其苦惱譬ふるに物なけれは有擊の「ベガル」侯も弱り果て引返さんと宣まふを「マーチン」は嫌し厭まし猶も深雪を踏み分て辛くも山の絶頂に

百六十一

來りけるに「サヲー」の姿更に見ねは大に望を失なふて一時に身体の疲勞を覺ゑ最早一歩も運ひがたく思ふ折り東より西に通へる小徑の上に人の足痕を認めーかは勇氣再たび舊に復ー山路を下りて行くと未だ幾干ならず「ブラジル」國と白露國との境界を隔つる廣き深林の裡に來り四方漠々とーて何れを道とも定めかね爰に方角を失なひしが焚き棄たる灰の痕折りたる樹の枝或ひは足痕などありければ之を枝折として兩人は辛くも道を尋ねつゝ只管路を急ぐ程に或る日の暮に至りて忽ち一條の大河に來にけり這は有名なる「マディラ」河にして兩岸には樹木鬱草生ひしげり水勢轟々石を流して水波高く揚る爰に至りて兩人

は「サムボー」始め一同は此河を渡りたるか之を知るべき便なければ困じ果てつゝ如何すべきと河邊に佇、立み暫し默思ねたりーが「マーチン」も如何にもして其實跡を見届けんと岸に沿て尋ぬるに但在る林間の小徑に當りて如何にも多人數の過ーと思ふ形跡顯然たりければ足を旋して此由を「ベガル」侯に告んとなーける時側近き樹立の陰に何やらん蠢めく者あるにそ劔を右手に取り上げて若し敵にはあらずやと近づきて能く見れは人にはあらで馬なりけり脾腹を深く貫ぬかれ今や死なん有樣なり「マーチン」は之を視て心の裡に思ふやう偖ハ我が父等此處に來りて此の河を渡るとき馬を伴ふふと叶そざれは可惜人手に渡さんより

寧ろ殺すふ如くとなしと斯くは殺せしものならん斯る上
て此處より渡りたるに相違なーと思ひにければ候に對ひ
彼等ハ必定此の處より渡りたるに相違なければ我等が旅
行も明日にて最早や全たく終るべー一時も猶豫すべきに
非ず誘此所を泳ぎ渡りて彼等の跡を追ふべーと云は候ハ
一議に及はず手早く衣帶を脱ぎ棄て兩人が衣類を一塊と
なし「マーチン」之を頭に戴だき共に水中に跳り入りーが此
彼齊しく水練は素より得意の事ふれは水を行くと陸に變
らず難なく水面を泳ぎ渡りて向ひの岸に着しうは再たび
足痕を尋ね出だして只管跡を逐ふたりける單題「サラー」ハ
思ひ掛ふく「サムポー」に奪ひ去られ情用捨もあらく〜く

馬の脊中に縛られつ逐立られて山又山夢の心、地に迚りつ
〜既に「マディラ」河を越にたれは馬ハ後邊に乘り捨て靴履
も穿せず徒歩跣足兩人の漢子に兩手を捉まれ引きずられ
ゆく無慘の有樣双に齊しき石の上針を欺むく荊棘の中を
も其處とも知らず歩みにけれは素より軟弱き女の身爭で
う永く堪へ得べき足の皮裂け破れつ〜流るゝ鮮血は道を
染め息も絶なん無量の辛苦現世うらなる地獄道針の山中
引立られ待ち設け居たる山中の印度人等は「マーチン」が世
に淺まーき反逆に因りて革命の計策齟齬ひ親方敗北ふー
たりと聞き烈火の如く憤ぷほり是と云ふも源を糺せば皆
な此の妖婦の爲すところと「サラー」の身邊に群れ集ひ馳せ

來りて異口同音に罵り騒ぐと大方ならず爾る程に「サムボー」の一行ハ人家凡そ百軒ばかり有る一個の村落に着しかは婦人小兒夥多出て軍陣の模樣を尋ぬるに「マーチン」が反逆に依りて事就らざる由聞と齊しく皆な聲を放つて大に嘆き我が夫の殺されしも我が父我が兄の戰死せしも皆な此の女の爲す業かりアナ憎むべし〳〵假令へ屠りて其肉を啖ふも猶ほ飽き足らぬ賊婦かり殺せ〳〵と犇めき合ひ手に〳〵小刀を振り廻し或ひハ石を拾ひあげ「サラー」を擊んと競ひしうは「サムボー」之を制し止め斯る賊婦を尋常の刑に處せんと面白うらず各々暫らく鎭まりて予が余宣告する處の判決を聞たまへと聲を放つて云ければ群集は漸

やく手を止め皆々「サラー」を白眼たる顏色宛から惡鬼の如く取も啖そん有樣なれハ「サラー」ハ生たる心地なく頭を抵れて默然たり寄り集ひたる印度人ハ「サラー」の刑罰如何あらんと靜まり返つて「サムボー」の宣告を打ち聞に此村落より少し下りて「マディラ」河と水勢激しく高きよりして落下る一大瀑布は玉を飛ばし岩を碎きて其瀧壺の深さと幾百尺と云ふを知らず今宵一夕は此所にて十分「サラー」を苦しませ明朝太陽の昇るを待ち木皮船に「サラー」を乘せ瀧の上流より之を流して溺殺の刑に處するものなりと聲朗らかに言渡すを聞くより群集ハ一同に歡聲を發して打ち喜び手拍喝采鳴も止まず愉快々々と呼はりけり此夜數多の

印度人と「サラー」の周圍を取り卷て共に「ブランデー」酒酌かゝし各自松明を振りてらして跳り狂ふて絶ざれは「サラー」と悲ーさ遣る方おく、泣くより外に事そおき嗚呼薄命なる此の佳人幼稚き時母と共に難船の危難に逢ふて一旦海に溺れたりしも親ならぬ親に救はれて養育られたる幸福は幸福ならで禍災とふ。り變りたる嘆きの雨養ひ親の貪慾より十万金に身を賣られ思はぬ人に思はれて其災厄を漸く脱れ思ふ情人に逢ひ見たる折ーも忙しき修羅闘場生死浮沈の山坂に情用捨も荒志雄等に生擒の身と成の果犯せし罪もあらざるに情人の罪科を身ふ負ふて今また溺殺の惨刑に逢ふは實に哀れふる限なり斯て夜も明け渡り朝日眼

眩く差昇れば印度人の荒志雄等時至りぬと罵ーり騒き再たび「サラー」を引き摺りて瀑布より一町右左上流なる河の岸邊に連れ行けば繋ぎたる一艘の木皮船あり彼等は「サラー」を抱き乘せ設け置きたる丸木の柱へ荒繩もて括り付け繋ぎし綱を切り放せは船は木の葉の飛ぶ如く流れに隨がひ下りたり是を見て集まりたる數十人の印度人は何れも手を拍ち躍りつゝ喜こび合こう無惨かれ此時「マーチン」と「ベガル」公は河の前面岸に顯われ出で此体見るより涙に暮れ我が娘よと叫べども顔さへ得あげぬ縛ーめの繩に繋がる親子の情縁今や果敢ふくうたかたの泡と消なん風情なれは「マーチン」と身を跳らして河中の岩に飛び移り帶をと

印度人と「サラー」の周圍を取り卷て共に「ブランデー」酒酌かわし各自松明を振りてらして跳り狂ふて絶ざれは「サラー」も悲しさ遣る方おく、泣くより外に事そおき嗚呼薄命なる此の佳人幼稚き時母と共に難船の危難に逢ふて一旦海に溺れたりしも親ならぬ親に救はれて養育られたる幸福は幸福ならで禍災とふ。り。變りたる嘆きの雨養ひ親の貪慾より十万金に身を賣られ思はぬ人に思はれて其災厄を漸く脱れ思ふ情人に逢ひ見たる折しも忙しき修羅闘場生死浮沈の山坂に情用捨も荒志雄等に生擒の身と成の果犯せし罪もあらざるに情人の罪科を身ふ負ふて今また溺殺の惨刑に逢ふは實に哀れふる限なり斯て夜も明け渡り朝日眼

眩く差昇れば印度人の荒志雄等時至りぬと罵しり騒き再たび「サラー」を引き摺りて瀑布より一町右左上流なる河の岸邊に連れ行けば繋きたる一艘の木皮船あり彼等は「サラー」を抱き乘せ設け置きたる丸木の柱へ荒繩もて括り付け繋ぎし綱を切り放せは船は木の葉の飛ぶ如く流れに隨がひ下りたり是を見て集まりたる數十人の印度人は何れも手を拍ち躍りつゝ喜こび合こう無惨ふれ此時「マーチン」と「ベガル」公は河の前面岸に顯われ出で此体見るより涙に暮れ我が娘よと叫べども顔さへ得あげぬ縛しめの繩に繋がる親子の情緣今や果敢ふくうたかたの泡と消なん風情なれは「マーチン」と身を跳らして河中の岩に飛び移り帶をと

く〳〵係蹄に結び矢を射る如くアハヤ今瀑布に落んと流れ來る彼の「サラー」の乘たる船を目懸て曳と投げ付たる狙ひ違はず舳先に掛けて引止たり彼方の岸なる印度人ハ之を見るより大に怒り殺せ〳〵と罵しり曾ふ其言葉未だ終らざるに一筋の矢風を切つて遙かに此方に飛び來り「マーチン」が胸元を裏欠くまでに射透しければさしも剛勇の英傑も急所の深痍に堪りねず眞逆樣に「サラー」の乘たる船の中に落ち入りて其がまゝ渦に卷れつゝ船諸ともに底ともしらぬ深淵の水屑となりぬけり「ベガル」侯は此を見てアナ慘酷やと驚ろきたまふ其間もあらせず飛び來る自由の征矢に射透され果敢なく其場に死したりけり實に「マ

ーチン」と勇秀で義心ふ富る壯士なれど一朝婦女の色香に迷ひ同盟に背きて千載に汚名を流す夫のみか自由の旗に曜りつゝ「マディラ」河に沈沒し祭つらぬ鬼となりにけり恐るべきは戀の道愼しむべきは男女の情古し昔と今とを問ず戀の闇路ふ踏み迷ひ孝を損なひ義を忘れ世の胡虜となれる者其數擧て筭へがたし豈に浩嘆に堪ゆべけんや依りて今此の小說を綴りつゝ岐道の迷を釋く由もがな

明治廿八年十二月二十日印刷
同　年十二月廿一日發行

短銃

版權所有

著作兼發行者　東京市日本橋區通三丁目十番地　野村銀次郎

印刷者　東京市四谷區傳馬町三丁目廿三番地　高橋近行

發行所　東京市麴町區麴町四丁目十三番地　磯部太郎兵衛

特 8
239

095099−000−2

特8−239

短銃

磯部　太郎兵衛／刊

M28
DBQ−2707